
藤の花の匂う頃

yuki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

藤の花の匂う頃

【Nコード】

N6635Y

【作者名】

yuki

【あらすじ】

親が金持だが身分の低い花房は、中納言家の姫の婚礼のための新たな女房候補として、京の都に上京するが、この結婚は先の帝に狙われていて、それを知った中納言は花房に姫の身代わりとなる事を要求。花房はそれを引き受けた。その献身的な行動に姫の結婚相手、大将に妻の座を提示されるが花房は返事を出来ずにいた。

上京

康行はしつこく食い下がっていた。私はうんざり声でさえぎった。

「いらぬ物は、いらぬの。何よ、そんな安物」

康行は真つ赤になって言い返した。

「安物なんかじゃないぜ」

「嘘おつしゃい。侍で飼われ者のあんたが、たいしていい物を買える訳が無いじゃないの。あんたなんかにもらわなくても、私はお父様から素晴らしい螺鈿細工や、彫刻の櫛をたくさんいただいたているの。田舎長者の娘と侮らないでほしいわ」

まあ、この物のいい方こそが、劣等感の表れなのは分かっているけど、康行があんまりしつこいので、つい、言ってしまう。

「今度の若君のご結婚は特別な事だからと、うちの殿様がお手当を大層弾んで下さったんだ。それを田舎にも送らずにお前のために買った櫛なんだ。若君だつてこれは良い物だとおっしゃって下さった。受け取つて、損は無いはずだ」

そう言つて康行は尊大な顔つきをする。

ふん。しゃらくさい。

確かにあんたのご主人のお父様は、今、京の都を牛耳る大納言様でしょうけど、私の姫様のお父上だつて中納言でいらっしやる。ご主人様の格を言うなら殆んど同格よ。

私は康行を見下した。たとえばではなく、本当に縁の上から見下ろしている。なぜなら私はこの、中納言家の一の姫様の女房、と言っても小間使いに近い立場だけれど……であって、康行は武蔵の国から雇われてきた、下男同様の立場、侍だからだ。私はこの屋敷にいる以上、主人の許可も用事もないのに、人前ではしたなく屋根の外へ出る事は出来ないし、康行は大納言家に飼われている立場なので、貴人や女人の上がる建物のうちへは入れない。

しかも、ここは中納言家のお屋敷だ。元の身分は康行と私は同じでも、ここでは私が何かと有利。だから私も強気で受け答えをしているのだ。

「京で男が最初に贈るのは、モノじゃ無くて和歌よ、わ、か。それに私だって国に帰れば武蔵で名をさせた長者の娘。あんたなんかに贈られたものを持っていたりしたら、いい赤っ恥だわ」

「たしかにお前の名前は有名だよな。じゃじゃ馬の花房さんよ」

「なんですって?」

私が康行にかみつこうとしていると、女房仲間で姫様の乳母の娘、乳姉妹の「やすらぎ」に声をかけられる。

「花房、こんなところにいたの? さっきっから探していたのに。早くしないと姫様に怒られるわ」

「うめん。すぐ行く」

実はこれはやすらぎの助け船。私が苦手の康行に引っ掛っている

のを見かねて声をかけてくれたのだろう。姫様の元に参上するのが遅れているのも事実だけど、姫様が私達をあからさまに叱ったり、たしなめたりするのを私は見た事が無い。

それでも康行は美しい漆絵の櫛を縁の上に置いて侍所へと帰って行った。私も結局そのままにはしておけず、その櫛を手を取ってみる。

確かにそれはみごとな漆絵の、櫛目の細やかなものだった。上質なものだと一目で分かる。

私の父は身分が低いながらも、金の力を借りて、私にありったけのモノを買い与えていた。だからモノの良し悪しくらいは分かるのだ。

あーあ。無理しちゃって。

でも、本当のところは、私こそかなり無理をし続けている。康行は苦手だし、武蔵の国の侍は乱暴者で有名だから、相手にするつもりはないのだけれど。それに、なんのために作法見習いに、ここに勤めたのか分からなくなってしまうのだけれど。物持ちの父に育てられたとはいえ、所詮田舎者。きらびやかな、京の邸暮らしは何かと気骨が折れる。同郷の康行とちよつとした言い争いをするのは、実はよい気晴らしになってはいるのだ。

本来なら、こんな立派な方々にお仕え出来る身分ではない私が、下働きの下女ではなく、女房として一の姫様にお仕え出来るのは、父の金の力もあるのだけれど、私が何故か姫様に気に入られたのが

一番の理由だ。

姫様は私の一つ下の十五におなりになる、愛らしい顔立ちの方で、一時は帝の女御様候補にも挙がられた。

だが今は中納言様の政治的お立場が難しい時で、やむなく御入内はあきらめられたのだとか。

実際、帝には何人かの女御、更衣様方が寵を競っていらして、すでに后宮に男御子も儲けられているので、その後を追ったとしても、姫様が幸せになられたかどうかは難しいところ。中納言家にとって政治的なうまみもあまりなかった。

しかも、早々とその男御子様か赤子の身で東宮になられたので、これはむしろ、早く一の姫に女の子を産んでいただいて、お年頃になられたら東宮の元に入内させる方が、時も稼げて一石二鳥、と、中納言様は考えられたらしい。

そこで、今やこの京の都で最も権力を誇っている大納言様のご長男と、姫様の縁組が組まれる事になった。

そこそこの家柄の姫君や若様なら、評判を聞いて、和歌や手紙のやり取りをして（それでも互いの顔を見る事は出来ないのだけれど）几帳をはさんで会話をしたりして、気が合えばご結婚の運びとなるのだけれど、ここまで上流の、一度は帝の元へ嫁ごうかとされた方にまでなると、気が合うも合わないもなく、家柄と政治力と、親の相性がモノを言うので、お話が来た時点でご結婚が決まったも同然。

さっそく新しい女房や、下女を増やそうと、中納言様が当てを探していた所に、私の父が、今は亡き私の母の妹につてを頼って私を

推薦させたのだ。

父は今では地元的女性と再婚して、長者としての地位を築いているが、昔は私の母の元に通い、そこで私が生まれたいらしい。母は下流貴族の家の人だったらしく、父が財を築く元手になったのは、母の家の人間関係による援助があった事も大きかった。母は私を生んですぐに亡くなったが、普通、女の子は母方の実家で育てられるのが常なのに、父は私を自分の郷里の武蔵の国へ連れていき、そこで私を育ててくれた。

郷里で成功を治めた父は私に都の様々な情報を与えてくれた。

読み物、詩集、きらびやかな衣装、流行の和歌、美しい細工もの。私は自然と都に憧れをもった。

いつの日か、京の都で暮らしてみたい。

私は父に甘やかされて育ったせいかな、地元で評判のお転婆と言われるようになっていた。父と再婚した義母はその事に胸を痛めていて、

「いつそ花房さんをどこかのお邸にお勤めに出したらどうでしょう？」と、言いました。

義母にしてみれば、地元の国守の邸に行儀見習いに出すつもりだったのだからけれど（そう言う事は良くあることなのだけれど）幸い、私には母と仲の良かったという、母の妹である、伯母とのつながりがあった。都で暮らす絶好の機会である。

私は父に頼みこみ、叔母にきちんと連絡を取り続ける事を条件に、普通では無理であろう権門の家の女房候補として上京したのだった。

叔母の家で支度を整え、他の人たちと中納言様の正妻でおられる北の方、つまり、姫様のお母上様と、姫様にお目にかかる時、誰もがかしこまって顔も上げられずにいる中で、私はどうしても好奇心に勝てずに、顔を少し上げてお二人の顔を見ようとした。

そこを姫様の乳母、やすらぎの母親に見とがめられて、失礼だと叱られたのだが、つい、田舎にいた時の勢いで、

「私は身分がいやしいですから、ここで追い返されるやもしれません。だったら都のお姫様のお顔を、一度くらい拝見しておきたいんです」と、言い返してしまった。

皆が息をのむ中で、一の姫様がコロコロとお笑いになられた。そこで私と姫様は初めて目があったのだが、その一瞬で姫様は私を気に入られたらしい。問答無用で私を姫様付きのおそばの女房に決めてしまわれた。

姫様の周りには、沢山の女房が仕えている。乳母や大人の実務を取り仕切っている女性達と、どちらかと言えば姫様のお話相手を要求される若い少女達。その中でも最も姫様に近いのは、乳母の娘の、姫様と乳姉妹である「やすらぎ」だ。姉妹同然に育っているので、彼女が姫様の事を一番よく知っている。姫様のこれまでのいきさつを教えてくれたのもやすらぎだ。

本来なら、身分いやしく、知識も才も、優れているとは言い難い

私なのに、やすらぎは

「姫様がお気に召したのなら、あなたは絶対いい人よ。都育ちではないけれど、決して頭の悪い人ではないわ。それに堂々と、のびのびとしたところがある。姫様はそういう方が好きなの。きっと私達も気が合うわ」

と、言って私を受け入れてくれた。

姫様と同じ年なのだから私よりも一つ下なのだが、とてもしつかりした人なのだ。

田舎者の私がそんな風に出世したのだから、当然周りにはねたむ者もいた。じゃじゃ馬でならした私はそんな事歯牙にもかけないつもりでいたが、風当たりが強くてはいい気持ちはしない。ところがそこをやすらぎが救ってくれた。

「せっかく新しい方々がいらっしやるのですから、今夜はにぎやかに過ごしたらいかがでしょう？」

やすらぎが姫様に提案した。

「それはいいわね。やすらぎの琴も聞きたいわ」

姫様も賛成して琴が用意されるが、やすらぎは琴を二つ用意した。

「花房さん。あなたも少しお引きになってはいかが？ 合奏も華やかでいい物だから」

そう言っつて私の前に琴を押ししてくる。

私は驚いた。琴は得意中の得意だ。父が都から来た人を呼んで、私に習わせてくれていたのだ。和歌の応酬や、都人の礼義には弱い私でも、琴なら負けずに弾きこなせる。

私がやすらぎとの合奏を終える頃には、周りの見る目が変わっていた。私はあとでやすらぎに尋ねた。

「どうして私を合奏に誘ってくれたの？」

「手を見たのよ。あなたの手には琴を弾く時のタコが出来ていたのよ。よっぽどたくさん練習されたのね。これなら絶対に素晴らしい音を聞かせてもらえると思ったの」

そう答えて、姫様と視線を合わせてにっこりと笑った。どうやら姫様とは何でもピン！とくる仲で、姫様も承知していたらしい。

権門の家のお姫様ともなると、こんな召使の人間関係にまで心配りが出来るのか。私は感心してしまった。

後に、これはこの二人の独特の特性で、どこのお屋敷に上がっても同じとは限らないと知っただけだ。

だから本当のところ、私も和歌や、詩を吟ずるのは苦手で、康行に言った言葉はまるで当て外れなのだけれど、同じ田舎者の私としてはこの方法が康行を手っ取り早く遣り込める事が出来るので、つい、「歌の一つも詠めない」と言ってしまうのだ。

それに父が私を都に出したのは、当然、都人とのつながりを意識している。

私が都の身分が上の男とつながりを持てば、それが一番だし、そうでなくても私を経由して都人たちとの人間関係を父は持つことが出来るだろう。万が一にも、貴人のお手つきにでもなれば万々歳

だ。さすがにそれは無いだろうけど。

だから、同郷で、身分が同じで、経済的には私よりも低いはずの康行なんかは私がかかわったとなれば、父はがっかりするはずだ。だから私は康行には辛辣になるのだ。

警護

中納言家では婚礼の仕度が着々と進められている。今後は大納言家の若君が、毎夜通われる事になるので、屋敷の中を増築し、そこを御新婚のご夫婦の寢所にする予定である。

若君は去年の春の除目で、少将から中将に御出世されたばかりだが、あの大納言のご長男、宮廷内での評判もいいとのことなので、今年の春には早くも大將になられた。つまりは出世街道まっしぐら勢いのついた若い上達部、貴公子という訳だ。

そういう婿君を通わせるのはその家にとっても大変な名誉で、人々の関心も集まるし、家族、親せき一同の出世や立場にも大いにかかわる。そのため婿君へのもてなしは、それはそれは心も贅も尽くしきられたものでなければならぬ。屋敷の中はてんでこ舞いだ。

大工や職人の出入りも激しく、庭先を見知らぬ人の姿が通り過ぎたりしている。今の姫様の部屋の方や、中納言様の北の方の寢所は静かなたたずまいを保っているが、ちよつと用があつて渡廊と呼ばれる、館と館をつなぐ橋状の専用通路を渡っていくと、沢山の人がいてびっくりしたりする。

これは遠い唐土の国や、もっと遠くにある国でも同じだそうだが、貴族の方々は御家族とはいえ同じ屋根の下で暮らすという事が無いらしい。大きな邸の敷地の中に、それぞれの館があり、それぞれに人が雇われ、設備を整えて暮らしている。

私は物持ちの父が贅をこらした邸に暮らしてはいたが、父や義母

と部屋は違えども同じ屋根の下で暮らしていた。

家が違つのは、下男や下女の者たちで、あとは父が通つ先の女人達ぐらいだろうか？

「同じ屋根の下で、家族で毎日ともに食事が出来る。これは貴人には無い楽しさだ」と、父は言っていた。

初めのうちは、姫様のご家族が、まず歌や手紙で御訪問の旨を伝えてきて、お返事の歌を送り、先駆けの者が来訪を伝えてから、ご本人が渡廊を渡つてお出ましになるのを私は物珍しげに見いつてしまった。

物語や本で知識としては知ってはいたが、その段取りや所作を見たのは初めてで、私も憶える必要があつた。

私のお仕える姫君様はまだ御母上である北の方様のお部屋の近くに住んでいられるけれども、増築先が整えば、そちらに移つていただく手筈になっている。だから私達も引越しの仕度に大わらわだ。

婿君とそこご家来のご衣裳の仕度を整えるのもこちらの役目、日が傾いてくると、油に火をともして縫い物に追われる。お針子の下女もいるにはいるが、それでも間に合わないのだ。

そんな忙しい中、私は姫君様の庭先に数人の侍がいる事に気がついていた。その中に康行もいる。

「なんで大納言家の侍達がここにいるの？」

私は康行に尋ねた。

「のんきな奴だな。こんな大きな邸にこれだけ大勢の人間が出入りしているんだ。いつ、何が起こるか分からないじゃないか。中納言家の侍だけじゃ足りないだろうと、俺達も大納言様に言われて助っ人に来ているのさ。お前なんかは知らないだろうが都つてのは物騒な所なんだ。盗人に強盗、人さらいに人買い。特に女子供は狙われやすいんだ。たとえ権門の家の女房でもな」

「まさか。あんた私を怖がらせようって思ってるんでしょ？」

私は秘かに、康行は長者の娘である私を出世のために狙っているんじゃないかと疑っている。郷里に帰れば田畑を耕して暮らしているであろう彼が、私に対して少々なれなれしいのが引掛つているのだ。

「本当にお前さんは世間知らずだな。いいか、都じゃ女はいい金になるんだ。まず、その着物だ、上質の絹の袷から、肌触りのいい綿の下着まで、幾重にも重ねたその着物だけで、貧乏人は自分、面白おかしく暮らせるんだ。それに髪の毛だ。その長い髪はいい、かもじ（つけ毛）の材料になる。髪は女の命だから、買い手は引く手あまただ。そして本人は淀の遊び女の元締めに売られて、春を売ることになるんだろう。その時も出自が良ければいいほど金になるのさ。姫君だつて今時は危ないんだ。へたすりゃかえって狙われる」

そう言えば、女房達の間でも噂になった話がある。さる権門の家の姫君が、家人に裏切られて夜中にさらわれ、そのまま行方知れずになっているが、東の国よりも北の地の遊び女に、姫君にそっくりな女がいたんだとか。

「特に、ここ最近は何騒な事になっている。まして今度のご婚礼は世間の注目の的。何かあったら、大納言様も中納言様も面目は丸つぶれだ。他にも男の社会には色々あるらしいが、俺もそこは噂しか知らない。何にしても俺達はお前さんの姫君をしつかり守らなければならぬんだ」

そういわれると邸の中のにぎわいも、何か落ち着きのない騒々しい物に聞こえてくる。

「嫌だわ。せつかくのお祝い事なのに」

「そう思うのなら、お前さんも姫君から離れないでいてほしいもんだ。それにあんまり動き回らない方がお前さんのためにもなるだろう」

「どつという意味？」

何か遠回りな言い方だ。

「どつという時、新参者は疑われる。ましてあんたは出自がいい方じゃない。金をつかまされて何かしでかすんじゃないかと、疑っている人間もいる筈だ」

「私がそんなことする訳ないじゃないの！」

思わず声を荒げてしまう。

「そういう見方をする人間も多いんだよ、都には。実際そういう事が起こっているんだからな。誰もが用心深くなっているのさ」

そこまで行くと、用心深いというよりも、疑心暗鬼という言葉の

方がしつくりくる。しつかりした紹介があつて、身元を調べつくした召使まで、信用できない世界なのか。

物語で姫君がさらわれると言えば、悲恋の恋人が姫を拉致するか、人妻に恋する間男が、思いあまつて夫人を連れ去るとか。そう言った美しい世界は、現実にはあり得ない物らしい。

「まさかとは思うけど、あんた達は大丈夫なんでしょうね？」
そう聞いて白状する悪党はいないのだが

「そうそう、そのくらい用心深い方がいい。お前さんは姫君から離れるな。なんだかんだ言つたつて、姫君のいらっしやる所が一番安全だ」

真剣に話していたかと思うと、からかいのそぶりが見える。どこまで気を許せるのか分からない。

「分かったわ。でも、あまり姫様の近くに姿を見せないでね。ご結婚前の落ち着かない時なんだから、少しでもくつろがれる時間を持つていただきたいの」

本当にそう思っていた。例の琴の一件から、私は姫様への肩入れする気持ちが強くなっていた。

「そこは俺達も若君に言い含められているよ。うちの若君もなかなか面白い人なんでね」

そう言つて康行は仲間の元へ戻ろうとしたが、思い出したように振りかえると

「あの櫛は気に入ったか？」と、聞いてきた。

「何のこと？」

私はとぼけた。

「……まあ、いいか」

そう言つて今度こそ康行は背を向けて歩いて行つた。

それにしても、康行という男はどういう男なのだろう？ 私はちよつと気になつた。

たかが侍。若君付きの従者と言う訳でもないのに、従者や使いの方が来る時にはいつも康行が警護についている。大納言家ともなれば、飼っている侍の数は相当なものだろう。その中でも高貴な方々に近い所にいつもいるような気がする。下男と変わらぬ立場にありながら、それほど信頼されているのだろうか？

その日の夕方に私は姫様にお声をかけられた。

「私の三日夜の宴の席で、あなたも琴を弾いてもらいたいの」

私は仰天した。そんな大切な席の演奏を新参者の私が勤めたりしてよいのだろうか？

ご結婚は三日の時間が必要だ。まずは初夜。婿君が姫君のお部屋を訪れて、お二人が初めて顔を合わせる晩だ。そして翌日も婿君はお部屋に通われて、いわば相性を確かめる。

そして三日目の夜に婿君のお披露目として盛大な宴が催されるの

だ。その後お二人で正式なご結婚をされたあかしとして、三日夜餅と呼ばれる姫君側で用意したおもちを召しあがっていただく。

この時三日間男君が通わなければ結婚は成立せず、女君は愛人という事になってしまふ。だから形式的とはいえ、三日目の夜の宴はとても重要なものなのだ。

この日の客人達は両家の親族は勿論、中納言家の面子をかけたそうそうたる顔触れになることだろう。演奏に携わる方々も、当代一流の演奏家たちが集められるはず。その中で私に琴を弾けと？

「そんなに緊張しないで頂戴。もちろんやすらぎにも弾かせるわ。この間の合奏のような演奏で私の婚礼を是非、飾って欲しいのよ。あなた達の演奏はどんな名演奏よりも私には価値があるの」

そう、言っていただけるのは本当にありがたい、とても名誉なことではあるけれども、じゃじゃ馬の私も、これには緊張する。あまりの事に背筋にひんやりと汗をかいてしまふ。

どのような演奏家がいらっしやるのかとうかがうと、宮中で大切な儀式の時に帝の前で演奏なさっている有名な方の名前がポンポン出て来る。聞かなきゃよかった。

「私はあなた達が心をこめて演奏してくれれば満足よ。でも、急こんなことを言われても緊張するなという方が無理でしょう。あなたはまだ、この邸にも慣れていないとは言えないのだし。練習する時間をあげましょう。花房はしばらく縫い物はしなくていいわ。夜の参上も控えてよろしい。心が落ち着くまで練習に励みなさい」

励みなさい、と、言われても。

しかしここまで言われると断ることもできない。私ひとりならともかく、やすらぎも弾くといふのだから逃げ場が無い。

仕方なく、私はしばらくの間、琴の練習に明け暮れて過ごすことにした。

このことを叔母を通じて父に知らせると、父は家の誉れと大喜びで、新しい琴と弦を用意してくれた。使い慣れない物では心もとないのだが、せつかくの心づかいなので、練習で慣れる事にする。

衣装も抜かりなく用意できそうだ。康行ではないが、女房は正装にお金がかかる。格の高い方々は、上質で軽く、暖かい品の良い衣装に身を包むが、私達は失礼のないように、十二の衣を身にまとう。質はともかく、きちんとした光沢のある絹を色とりどりに染め上げて、宴の花としての振る舞いが求められる。見ようによってはひと財産を抱えているような物なのだろう。

演奏するには邪魔なのが本音だが。

上達部（かんだちめ）

それから私は、每晚琴の練習に励んだ。もしも失敗しようものなら、自分の恥は勿論、家族や、この中納言家の人々にまで恥をかかせてしまいかねない。

私は父親が下司（庶民）の娘という事で、陰ではいろいろ言われているはず。そんな私が公の大切な席で失敗などしようものなら、中納言家に泥を塗るようなものだろう。

皆が忙しげにしている中での練習なので、私は遠慮をして、局と呼ばれる私達女房の宿泊場所の前にある縁に出て、一心不乱に琴を弾き続けていた。康行の話を聞いてしまった後なので、少し不安ではあったが落ち着いて弾ける場所が思いつかなかったのだから仕方がない。だから人の気配には全く気付かずに行った。

ふと、品のいい匂いがした。焚き締められた香のにおいだ。

女物の香ではない。中納言様の香でも、その従者の匂いでもない。だが明らかに上質な、貴人が使うであろう香りがする。しかしここは姫君の部屋の近く。いくら寝所からは遠いとはいえ、男性の貴人が案内も乞わずに入ってきてよい場所ではないはずだ。私は一気に緊張した。

こういうことは全くない訳ではない。姫君の元に男君が通う時は、従者や女房、あるいは従者の知り人の上達部にとっても、逢引の機会になっている。昼間、手紙で連絡を取り合って、夜、人気のない場所でこっそり逢瀬を重ねるのは、恋人同士にとっては常識だ。だが、この香はあまりに上品すぎる。それに女人の気配も感じないのだ。

「良い、音ですね。もうしばらくお聞かせいただきたかったな」

そう言つて、暗闇の中から一人の上達部が現れた。すつきりとした顔立ちの、十七、八の青年だ。私は慌てて扇を広げて顔を隠した。いや、隠そうとした。

女が貴人に顔を見せるのははしたないこと。不用意に縁に出たりせず、御簾の中から顔を出さず、いざという時は扇を開いて顔を隠すのがたしなみ。そんな事わかつちやいるけど、不慣れなしぐさに私はうろたえ、うっかり扇を落としてしまう。上達部はクツクと笑いながら私に扇を拾ってくれた。

私はあらためて扇を広げ直し、すでにバツチりみられてしまったであろう顔を隠し直した。顔を見せるということは、裸を見せてもかまいませんと、宣言したと同じこと。大失態だ。自分が一気に安っぽくなつた気がする。

「どなたかとお約束があるのでしょうか？ あいにくこちらには誰もいませんけど」

精いっぱい気取つた声を出す。とにかく落ち着かなくては

「約束事があった訳ではないのですよ。従者や下男、侍達の取り繕わぬ姿を垣間見ようかと思ひましてね。するとこちらから美しい琴の音が聞こえたもので」

「琴は音を楽しむもので、演奏者の姿をご覧になるものではありませんね」

私はわざと相手を非礼だとたしなめた。私の方の失態ではあるけれど、こっちは女。こういう時に身分がどうのと言っていたら、舐められてしまいそうだ。

すると上達部はプーっと吹き出してしまった。そしてとうとう本格的に笑い出す。

「武蔵の国のじゃじゃ馬姫から、そのような言葉が聞けるとは思いませんでした」

「私を御存じなのですか？」

私はビツクリした。実は都に来てから若い公達（公家の若者）をこんなに間近に見たのは初めてのことなのだ。何故私を知っているのだろうか？

「侍所の康行から聞きました。武蔵のじゃじゃ馬姫は琴の名手で、今は局で毎晩琴を弾いていると」

また康行！　なぜ、身分の低いあいつが、この方とそんな話をしているのよ！

「ああ、気になさらないでください。康行は私にとって特別なのですよ」

「特別？」

「私は馬が大好きでね。特に流鏑馬の馬にはことさら凝っているの

ですよ。康行は良い馬を育てる名人なんです。彼はもう、何度も都に来ていて、そのたびによい馬を用意してくれる。ただの侍として飼うにはもったいない男です。身分から従者にする訳にはいかないが、大納言家でも、彼のことは一目置いて、信頼しているのです。初めて大納言家に来た時も、私の可愛がっていた馬が生きるか死ぬかの瀬戸際で、康行の適切な治療と、懸命の介護のおかげで命拾いをしたんです。それにお互いに馬好きですから私は彼と気が合うんですよ」

「康行と気が合うんですか？」

立派な公達が、康行なんかと気が合うのか。荒々しげな武蔵の侍と。

「あなたは誤解している。康行の刀の腕は決して悪くはないが、あれはそんなに荒ぶった男ではありませんよ。一頭の馬のために身を尽くして世話の出来る優しい男です。白状すると、そんな康行が気に入りの武蔵のじゃじゃ馬姫とはどんな女人なのか、確かめてみたくてこっそり垣間見に来てみたのです」

最初から私が目的だったってどういうの？ いかにも貴公子と言った風情の方が、なんとまあ。

「あなたは大納言家の方なのですか？」
私は聞かすにはいられなかった。

「ゆかりのものですよ。こちらの姫君はもうすぐ大将とご結婚されますね。姫君はどのようなお方ですか？」

「美しい、というよりは愛らしいお姫様です。御心も優しくして決

して声を荒げたりなどなさらぬ、私のような、取るに足りない者にまでとてもよくして下さいませ」

「あなたが姫君のお気に入りだということは聞いていますよ。あなたを見れば姫君の人柄も分かるようだ。武蔵の国には素朴でよい人柄の人間が多いのでしようね。よい国なのでしよう」

私は気を良くした。郷里を褒められて悪い気はしないものだ。

「大将も、康行がお気に入りですよ。あなたの姫君とも相性が良いことでしょう。この縁組はきつと良い縁組になる。社会的な事だけではなく、姫君のお幸せのためにもね」

そう言つて上達部は立ち去ろうとする。

「あの、あなたは……」

「私がここに来たのは誰にも内緒ですよ。私のことならすぐに分かるでしょう。では、宴の琴の音を楽しみにしています」

そして上達部は去つて行つてしまわれた。私は呆然とするばかりだった。

「内緒ですよ」とは言われたが、私はこの一件を内緒にしておくつもりはなかった。あまりにも危険すぎる。

私が世間知らずでも、深窓の姫君のお部屋近くに、高貴な身分に見えたといえ若い男がうろつろつしていいはずがないことくらいは分かっている。

昨日の様子や話しぶりから見ると、暇を持て余した大将様のお知り合いの方が、康行から何かしら私の話を面白おかしく聞かされていたずら心を起こして私をからかいに来られたのだろう。

ただ、ここはご婚礼前の姫君の住まうところ。しかもいつも以上に厳重な警備が敷かれている中での出来事である。どうやって忍んでこられたのかは分からないが、放っておくわけにもいかない。

それに若君の事を「大将」と、軽く呼んでいらした。少なくとも従者や、乳兄弟ではない。もっと上の方だ。

身分の高い方は、実の親子でさえも簡単に訪ね歩くことはない。同じ邸のうちでさえ手紙のやり取りをする。

昨日の公達はこう言っちゃなんだけど、ちょっと軽々しい方なんじゃないかしら？

そういう方が何か間違いでも起こせば、大変な事にもなりかねない。でも、いきなり姫君に言うのもちょっとなあ。

康行の事に随分詳しくそうだったし、ひよっとすると康行があの人達にそそのかされて庭先に通したのかもしれない。

私に気をつけるように言っておきながら、油断も隙もありやしな
い。

「そんな事があったの？　なんだか信じられないわ」

私と局で同室になっっている桜子は、目を丸くしてひっそりと声を立てた。

「私は康行が手引きしたんじゃないかと思っただけ」

「そうかもしれないわね。警備にあたっては本人でもない、今の邸の守りをかいくぐるのは難しそうだわ。ねえ、これはそれとなく姫君様に伝えておいた方がいいわよ」

桜子は珍しく人のいい顔を曇らせていう。

桜子は私と女房仲間で二つ年上。越後の国の受領（国司）の娘で、越後育ちだ。とても色が白い。

私に来る前は彼女も田舎受領の娘という事で、肩身の狭い思いをしていたらしいが、人のよい、おとなしい人柄の優しい娘だ。同室になってみると、意外に明るいところもある人だと分かった。肩の凝らない人なのだ。

彼女は私に同情的で、自分と似たような立場の私をかばいたくなるようだ。最も私の身分では本来彼女の下に召し使われてもおかしくないのだけれど。

「でも、警護の侍が手引きしたかもしれないなんて、姫様を怖がらせるだけじゃないかしら？」

私はためらう。

「康行の事を心配しているのね？　そこまではつきり言う必要はないわ。約束した女房の誰かと落ち合えなかったらしい公達が、庭先をさまよっていたとでもいい繕っておけばいいのよ」

桜子は「どういうことにも物慣れていて、すぐに知恵を授けてくれる。ちよっとだけ康行が心配でもあった私は、その知恵に乗って姫様にご報告した。」

その日の昼間、その康行が私に声をかけて来た。

「お前、昨夜、上達部と話をしたんだって？」
はつきりとご機嫌斜めな顔が浮かぶ。

「私だって姫様付きの女房だもの。そういうことだってあるわ」
私はずん、としたまま答える。

「あんたの事に随分詳しい方だったわ。本当はあんたがあの方を忍びこませたんじゃないの？」

「俺がそんなことするもんか。この間注意したばかりだったのに、顔まで見せたそうじゃないか」

私は真つ赤になった。そんな事まで聞いているのか。

「偶然見られちゃっただけよ。だいたいあの方だって軽々しいわ。ここは大将様のご結婚相手の住まわれている場所なんだから。一体どういう方なのよ？ あんた、知っているんでしょ？」
思わずまくしたてる。

「そんなこと教えられない。まったくなんてじゃじゃ馬だ。琴ぐらい御簾の奥で弾いていられないのか？ 夜に貴人の前で顔を見せればどういうことになるか知らない訳じゃないだろう」

康行も言い返してきた。

「あら、それならそれで結構よ。私が女の身で出世の糸口をつかむかもしれないじゃないの。そうなれば誰も私を見下せなくなるし、お父様の立場もずっと良くなるってものよ」

「お前、本気で言ってるのか？ お前の身分じゃ殆んど間違いなく愛人扱いだぞ。暮らしに困った親無しの娘ならいざ知らず、わずかばかりの地位を上げるために本妻の方々に一生頭を下げ続ける人生を送って、何が出世なもんか。そういう女は表はともかく、裏では男達に見下げられているんだぞ。よく考える」

考えてるわよ。別にそれほど本気で言った訳じゃない。康行が面と向かって「顔を見せた」なんて言うから、引つ込みがつかなくなつたんじゃないの。どうして東男って、繊細さの欠片もないんだらう？

「少なくともあんたみたいな侍なんかの相手をするよりはよっぽどましだわ。それに私がそんなに簡単に男君を近づけると思ってるの？ 馬鹿にしないでよ」

私は心とは裏腹な事を言っていた。あの時は顔を見られてしまった事に動揺した上、初めて若い公達を前にして、すっかり普通ではなくなっていた。私は身分が低すぎるから、本気でかかれれば誰にも助けてはもらえないだろう。向こうもあまりみっともない真似はしないだろうけれど、経験が無いので本当のところは分からない。

正直、今頃になって冷や汗の出るような思いをしている。

「じゃじゃ馬のお前なら大丈夫か。思ったよりは冷静だったんだな」

全然冷静ではなかったのだけど、私にだって意地がある。ここは誤解しておいてもらいたい。

「今日はうちの若君がこちらを訪ねにくるぞ」

「え？」

「中納言様にお話があるらしい。姫君のところへもご挨拶があるだろう。それですべて分かるぞ」

そう言うと、康行は私の返事も聞かずに不機嫌そうに去って行ってしまった

身代わり

その夜、中納言家はわかにはざわめいていた。大納言家の若君、近衛の大将がおこしになっているのだ。

只今中納言様とご歓談中で、後ほどこちらへも御挨拶に来るとい
う。

御挨拶と言つても、姫君と大将様は顔を合わせることはできない。奥に引きこもられた御姿も見えないし、もちろん姫君の御声をお聞かせするわけにもいかない。事実上、周りで働く私達との顔合わせのようなものである。

果して姫君様のお相手はどのような貴公子なのだろうかと、私達はワクワクしながら待っていた。

姫君は部屋の一番奥の御簾の中、さらに几帳を立てたその奥に脇息に持たれていらつしやる。

そのそばには乳母の君と上？と呼ばれる古参の女房が控えている。手前にはやすらぎ達若い女房。その中に私もいて、御簾のうちから出てきては、畳や敷物の用意をする。客人のお世話をするのに顔を隠す訳にはいかないので、皆、かしこまる意味も兼ねて頭を低く垂れている。

知らせを受けてしばらくすると、衣擦れの音とともに大将様がやってきた。私は一層深く頭を下げる。

「春とは言え、いまだ梅も咲き初めぬような冷やかな夜に、わざわざ

ざ足をお運びくださり、ありがとうございます」

姫君の御言葉を声が良くて同じ年ごろのやすらぎが、大将様にお伝えする。

「本日は中納言殿にご相談があつてお伺いしたのですが、こちらに
も少し御挨拶をと思ひまして」

大将様の御声を聞いて、わたしは「え？」と、戸惑った。聞き覚えのある声だ。

下女が運んでくれた酒と肴を御前にお出しするのに、私は思い切つて大将様のお顔を見た。

そこに座つておられたのは、昨夜、私をからかわれていた、あの上達部だった。私は啞然とした。

どおりで「大将」と、軽々しく呼んでいらした訳だわ。だって当のご本人だったんだから。

警備の間をすり抜けられたのも至極当然。姫様の部屋周りの警備に侍を用意したのは大納言家。おそらく大将様ご本人だ。この警護に誰よりも詳しい。皆の前では私も大将様も知らんぷりをしていたけれど、おそらく大将様の心の中では昨夜のように噴出していたに違いない。

なんてばつが悪い。

こんなこと、誰にも言えやしない。姫様のご結婚相手に、夜、

人気がない所で、顔を見られてしまったんだから。

大将様がお帰りになられた後、皆がかしましく大将様をほめたたえる中で、私はつい、黙りがちになってしまった。

姫様ややすらぎが心配するのは分かっていたけど、私の中で大将様は「変な公達」から「とんでもない公達」に格上げされてしまっていたので、とても口を開く気にはなれなかったのだ。

「どうしたの？具合が悪いのなら下がって休んでいいのよ」
そう姫様に言われると、申しわけなくなるんだけど。

そこへ今度は中納言様のお使者がいらっしやって、私とやすらぎに話しがあるから参上するようにと言われる。

乳母の君や、上？の方々を差し置いて、私達に話しなんて。昨日から異常事態のてんこ盛りだわ。

中納言様の前に参上すると、中納言様は北の方とともに深刻な趣でいらっしやった。

「実は今日、大将殿がうちに来たのには訳がある。このままでは一の姫の身に危険が及びそうなのだ」

私とやすらぎは顔を見合わせた。どういつことだろう？

「今上の兄帝で、前の帝だった方を知っているな？」

前の帝はお小さい頃から御気性が荒く、帝の地位につかれてからも、中納言様とのそりが合ってはいなかった。

そのため何かと政務上の衝突も多く、国の人心も真つ二つに割れてしまった。

そこで中納言様は一計を案じた。その頃、前の帝には大変ご寵愛が深い女御様がおられたので、その方がご病気になった際に、病氣平癒の祈願に大変効果があるという、ある僧侶を宮中に招いて、日々、祈祷を続けさせた。

その僧侶は日ごろから国の政策が二つに割れている事に心を痛めていて、女御様のご心配のあまり気の弱くなっている前の帝に、連日のように御国譲りをそそのか……いや提案していたという。

その甲斐あってか、前帝は弟宮にその地位を譲られた。そして女御様も回復したかのように思われた。

ところが女御様は翌年にあっけなく亡くなってしまった。

当然中納言様は前帝に恨まれた。このような形で帝の地位を追い落とされた前の帝に同情が集まり、中納言様の信用は落ちてしまつたかに見えた。

それを追って今度は大納言様の力が大きくなっていった。世の流れは大納言様と今の帝へと移っていく。

しかし中納言様もしたたかだった。大納言様が勢力を伸ばすのに、中納言様も自ら全精力をかけて協力していた。大納言様はとうとう

都の勢力のほとんどを支配するにいたった。自らの娘を後に据え、東宮を産ませ、盤石の地位を築いたのだ。献身的に協力していた中納言様もそれに次ぐ力をつけた。

一度、信用を落としているので、いまだに政敵も多く、一の姫様の御入内は叶わなかったものの、こうして大納言家との結婚にこぎつけて、両家の力と依存しあう関係はますます深まっている。これは国中の人間が知っていることだ。だから、前の帝、と言えば、この邸では中納言家を恨む恐ろしい方、というのが普通の見方になっている。

「前の帝が嵯峨野の別邸に、怪しい者達を集めていると聞いた。色々と探ってみるとどうやらこの結婚を阻むために姫を拉致しようとたくらんでいるらしい」

「これ程警備が厳しい中をですか？」
にわかには信じがたい。

「花房、先ほど大将殿に聞いたのだが、昨夜、お前は大将殿と会ったそうだな」

私は思わず青くなった。男君が女房を相手にするのは許されるとはいえ、（むしろ、邸に引き留める理由は多い方がよいとはいえ）今は結婚前だ。間が悪い。

「も、申しわけございません！」
これでは暇を出されても仕方がない。なにもなかったことをどう証明しよう？

「お前を責めるために呼んだのではない。詳しい話は大将殿から聞いている。実はお前に頼みがあるのだ」

「私に、ですか？」

「お前に姫と入れ替わってもらいたい」

一瞬、私は息が出来なくなった。いったい何を言い出すんだろう？

「さつき、お前に聞いたとおり、大将殿は昨夜、姫の近くに忍び込む事が出来た。つまり、内部に詳しい者が裏切れば、姫をさらうことは、決して不可能ではないということだ。昨夜、大将殿はそれを試されたのだ。今、この屋敷には大勢の人間が出入りをしている。このままでは危険だ。そこで姫を別の場所に移そうと思うのだが、姫がいないことを怪しまれては困る。そこでお前に姫の身代わりを務めてほしいのだ」

身代わり？ この私が？ よりによって姫君様になり変われというのか？

「そんな事が出来るのでしょうか？」

私はすぐには頭が回らなかった。隣でやすらぎも啞然としている。

「姫の新しい寝所には、明日にも移る事が出来よう。少し早まったが明日、さっそく引っ越しをする。その時にお前と姫に入れ代ってもらおう。このことを知っているのは私達夫婦と乳母、姫のごく近い女房達だけだ。上？の者達と乳母には姫について行ってもらう。お前には新しい寝所で、やすらぎ達と一の姫として三日夜を迎えて

もらう。その夜の宴の時にまた入れ替わってもらう手筈にしようと思つ。礼はどんなことでもする。これはぜひ、引き受けてもらいたい」

「ここでやすらぎが口をはさんだ。

「待つて下さい。花房さんの身の安全は守られるのですか？」

「警備は今まで以上に厳しくする。もちろん花房は寢所の奥から動いてはならない。出来うる限り家人にも姿を見せずにいるほしい。やすらぎ、お前は姫の事に一番詳しい。いかにも姫がそこにいるようにふるまうてほしい」

姫様は寢所の奥で結婚を待つ身。確かに黙っていればやすらぎの演技次第でごまかすことは可能だろう。しかし、私としては問題がもう一つある。

「三日夜の宴までの身代わりとおっしゃいましたが、その前の二日間に大将様は御寢所に通われる訳ですよ」

それがどういうことを意味するのかは、知っていたの依頼なのだろうが。

「結婚には三日間、通うのがしきたり。当然大将殿も通われるが、事情はすべて知っておられる。大将殿はお前の顔を見知っているのだし、勘違いなさることはない。大将殿なら決してお前を悪いようにはなさらないだろう」

やっぱり。中納言様は私をかなり軽んじてらっしゃる。命は守っ

て下さるだろうが、あとは大将様の御心次第か。身分のいやしい私
が顔を見られている以上文句は言えないという訳だ。

私だって、ここまでされればこんなお話はお断りしたい。身分は
低くても低いなりに、女人としての自尊心はある。

でも、ここで私が断つても、他にこの役を引き受ける女房がいると
は思えない。こんなことまでするということは、本当に姫様の身に
危険があるということなのだろう。

やすらぎが心配そうな視線を私に向けてくれている。姫様がいな
ければ、私はここにすることは無かった。

「分かりました。お引き受けいたします」

「あなたは昨夜、公達を見かけたのではなく、大将様にお会いにな
ったのね」

姫様の部屋に戻る道々、やすらぎは私に問いかけて来た。

「やすらぎ、私、大将様とは」

「分かってるわよ。なにもないんでしょう？ あなたは琴を弾いて
いて、引っ込み損ねただけ。それに女の部屋の前に忍び込んでこら
れたのは大将様のほう。あなたは何も悪くないわ」

「ありがとう。信じてくれて」

中納言様に軽んじられたあとだけに、やすらぎの気持ちが身にし
みる。

「あなたのような人が姫様を裏切るような真似が出来る訳が無いわ。夜がれ（夫が通わなくなる）の心配がある夫婦ならともかく、これからご結婚なさるうという方に、あなたの方から声をかける訳が無いじゃないの。こういう時は身分を気にしてはだめよ。あなたは堂々としている時が一番輝いているんだから」

こんな風にやすらぎに励まされると、郷里に吹く、一陣の風を思い出す。向かい風に向かって何かに立ち向かっていく時の、湧きあがるような心を取り戻すことが出来た。

「でも、本当に良かったの？　こんなことを引き受けてしまってやすらぎは心配してくれる。」

「ええ、大丈夫よ。両家とも面子をかけて私を守ってくれるはずだし、大將様も、昨夜お話した限りでは少し軽々しいところはあっても、いい加減な方とも思えなかったし。私がしっかりしてさえいれば、事はうまく運ぶはずよ」

私は取り戻した自信を支えに、心がすっと立ち上がったように感じていた。

侵入者

その夜のうちに私と姫様の入れ代わり計画は準備を整える事が出来た。

勿論、姫様は私を心配して反対なさってくれたけれども、私はもう、腹を固めてしまっていた。

こんなこと、叔母や父に言う訳にはいかないので、私は宿下がり（休暇）をいただいで、女房仲間と都でも有名な清水の観音様におこもり（寺に数日間の宿泊をして祈願を立てること）に行くという事にしておいた。これなら私と連絡が取れなくなっても心配されることはない。

万が一のことを考えて、私達は姫様がどちらに身を隠されるのかは聞かないことにした。余計なことは知らない方が安全かもしれないし、最悪、私達の身に何かがあっても姫様の身だけは守られることだろう。

翌朝には新しい寢所に姫様は入られ、その一番奥の、塗籠と呼ばれる四方をふすまに囲まれた、外から全く見えない小部屋の中で、私と姫様は衣装を取り替えて入れ代わった。

姫様は乳母の君と上？達に守られながら、そっと牛車に乗り、いずこかへと姿を消される。

私はしばらくの間、やすらぎと寢所の奥で、声も立てずにひっそりと暮らさなければならぬ。

その時間を利用して、やすらぎは姫様のしぐさや癖、お好み、さらにはお小さい頃の思い出話などを教えてくれた。

やすらぎの思い出話は、姫様の今の性格が作られた理由を知る手がかりになった。

帝が変わられ、中納言様に非難が集中していた頃、邸の外の噂話などを幼い姫様にお聞かせしないようにと、誰もが相当気を使っていたため、姫様は自分の周りの人々が冷たく感じられたらしい。腫れ物に触るような扱いに日々鬱憤も溜まっていく。そのうちにお顔の色も悪くなり、食欲まで無くされて、もののけでもついた様になってしまわれた。御心配された中納言様は、姫様を吉野のお寺へと連れて行かれた。御祈祷を受けるのは勿論のこと、ちょうど桜の時期でもあったので、お気が晴れるだろうとの御配慮でもあった。

その行きがけにお寺に向かう親子の姿があったのだが、幼い子供が足をくじいてしまったらしく、親は懸命に子供の足に濡らした布を当てている。それを牛車の中から見ただけ姫様は子供を哀れに思い、従者に腫れを引かせる薬を親子に分け与えるように言った。薬を受け取った親は大変感激し、

「このようにお優しいお姫様の御父上である中納言様が悪い方であるはずはない。世間のうわさなど当てにはならない。素晴らしい方々だ。もったいない、もったいない」

そう言って、いつまでも頭を地面にこすりつけていた。そうしてたどり着いたお寺で、姫様は御仏の慈愛について説法を聞くうちに、父上の評判や、周りの人間の接し方などに振り回されるよりも、自らの心を穏やかにする事が、巡り巡って、家の幸せにつながっていくのだとお考えになるようになったのだという。

それ以来、姫様は大きなお声を立てて人を威嚇したり、叱りつけるような事のないように、優しく、穏やかに日々を過ごすことに専念されるようになったのとか。

私などは金持ちの娘であっても、身分の低さを色々言う者は正面切って言って来るものばかりで、腫れ物に触る扱いも、あてこすりで白い目にさらされたこともない。田舎の人間は噂も嘘も真っ直ぐなものだ。

私は父に甘やかされて我がまま放題だったし、人の評判で、家の命運が決められてしまう心配もしたことが無い。しかし、高貴な方々ともなればそんな幼い頃から、人の目と家の名誉を意識して暮らし続けなければならぬのだ。それは一生逃れられない宿命だ。

生涯連れ添うかもしれない結婚のお相手さえも、選ぶ事が出来ない。すべてが決められた人生。

それならばせめて、せめて、召し使える女房達の誠意や、友情だけは本物でありたい。

恋のときめきや、自由は無くとも、穏健で穏やかな結婚生活であっていただきたい。

やすらぎの話を聞くうちに、私は本気で姫君様の健やかな幸せを祈る気持ちになってしまっていた。

その夜私は早くに床についてしまった。おとといからあまりにも

色々な事があり過ぎたし、緊張もつづいていた。なにも身体を動かしていた訳でもないのに（むしろ動けない！）心も身体もくたくたになってしまっていた。

だから綿のたつぷりと入った、真新しいふつくらとした夜具の着物を引きかぶって身体を横たえたとたん、ぐっすりと眠りこんでしまったようであった。

真夜中過ぎの頃、小さな物音に続いて冷たい隙間風を肩口に感じて私は目を覚ました。

早春の都はまだまだ寒い。田舎の寒さとは違う、ぞっとするような冷気が特有の地形から襲ってくる。だから屋敷の建物は床が高く、御格子と呼ばれる戸を閉めて冷気を防いでいるのだが、何処からか冷たい風が入りこんでいるようだ。私は着物をかぶり直そうと寝がえりをうった。

突然人の気配を感じた。声を立てようとして口をふさがれる。

賊は一人ではない。なぜなら私は二人がかりで担ぎあげられていた。一人はふさいだ手を放そうとはしない。息が苦しくなった。必死にあがくが二人掛かりではどうすることもできない。

内部に裏切り者がいるわ。

こんな時だというのに、真っ先にその事が頭に浮かんだ。私達がここに移ったその夜に、警備を一層厳しくした中で、二人もの人間が忍びこんでくるなんて、誰か内通者がいなくては不可能なことに

違いない。

息がとにかく苦しくなる。私は口をふさいでいる手に思いつきりかみついた。その手が緩み、声を上げる。

「誰か！」

助けてといい終えない内にまた口がふさがれる。いつの間にか開けられていた御格子をくぐって外へと連れ出される。風が冷たい。月もない夜なので辺りは真の闇夜だ。

もう一度かみついてやろうともがいていると、タツタと足音が聞こえて来た。

「御免！」

そう、男の叫び声が聞こえたかと思うと、別の男のうめき声が出て、私の体が自由になった。

しかしすぐに誰かに抱えられて、屋敷の方へと引き返す。縁に下るされて、その前に誰かが立ちはだかり、賊に斬りかかっていく。人の逃げ出す気配と足音がして、やがて辺りは静けさを取り戻した。

「失礼を承知で乱暴な真似を致しました。申し訳ありませんでしたが、場合が場合でしたので。お怪我は御座いませんでしたか？ 姫君」

声を聞いて私は慌てていた。そこに、騒ぎに気付いたやすらぎが火を持ってやってきた。

私達の姿に光が当たる。康行が呆然と私の顔を見ていた。

「お前は……お前は一体何をやっているんだ？」

康行にかいつまんで説明をすると、いきなり質問された。今、説明したじゃないの。

「若君の前で顔を晒して琴をひいただけでは飽き足らず、姫君になり変わって大立ち回りをする女なんて、下女でも聞いた事は無いぞ」

「失礼ね。普通の下女だったら、こんな事に巻き込まれたりはしないわよ。それに大立ち回りをしたのは康行で私じゃないわ」

「そんな話をしているんじゃない。これは女房としての役目を越えている。超え過ぎているだろう。まして三日夜の宴まで入れ代わったままでいるだなんて、いくら身分が低いとはいえあんまりだ。なぜ、断らないんだ」

「私が断れば姫様の身が危険なまま、御結婚の邪魔をされてしまうじゃないの。それではお可哀そうよ」

「お可哀そう？ お前今、自分がどんな目に会ったのか分かってるのか？ 姫君の代わりに連れ去られそうになったんだぞ。お前がニセモノだと知れたとたんに、殺されていたかもしれない。人に同情をかけている場合じゃ無いはずだ。こんなこと今すぐ断るんだ」

「それは無理よ。姫様はどちらにいらっしやるか分からないし、急に呼び戻すことも出来ないわ。ここに姫様がいらっしやらないと知

られたら、それこそ、どんなことになるか。もう、後戻りはできないの」

「自分の身をさらしてまで、姫君を守りたいと本気で思っているのか？」

あまりそんな深いところまでは考えていなかったが、康行に問いかけて、私は本気で姫様を守りたいと覚悟を決めた。

「そうよ」

私の覚悟が伝わったのか、康行は黙り込んだ。やすらぎはずっと黙ったまま、私達のやり取りを聞いていた。

「お前も都の人間になってしまっただな」
康行はさびしそうに言った。

そうよ、私はずっとそれを望んできた。ただ、それが今、思っていたほど楽しいことではなくなってしまったけれど。

「今日は俺がここから離れずに見張っていてやる。明日には増員されるはずだ。お前は安心して眠っていていい。ただし、日中は注意しろ。きつと内部に密通者がある筈だ。それも下女や下人ではなく、お前達女房の中にもいるかもしれない。十分に気をつける」

それは私も連れ去られかけた時から考えていた。私も真剣にうなずいた。

「今夜は安心して眠っていていい。ゆっくり休め」

康行は珍しく私をいたわる言葉を言って、私とやすらぎを御格子の開いた所へと連れて行ってくれた。

部屋へ戻るとやすらぎが私の手を握ってきた。

「ありがとう。命懸けで姫様を守ると言ってくれて。私もあなたと姫様を命懸けで守るわ」

やすらぎは涙ぐんでいた。やすらぎにとって姫様は生まれた時からお仕えして来た、姉妹以上の大切な方なのだろう。彼女の必死さが手から伝わってくる。

「一緒に姫様を守り切りましょうね」

私もやすらぎの手を心をこめて握り返していた。

身代わりの初夜

翌朝、姫君様の部屋に侵入者があったことは、屋敷中の話題になつてしまつていた。警備の人数は増員され、庭先にまで、侍や下人達の姿が見られるようになっていゝらしい。

私はこれを幸いに連れ去られかけた衝撃で、気分を悪くしてして寝所の奥に伏せつてゐる事にしてゐた。女房達への対応はやすらぎが一手に引き受けてくれる。夜具をかぶつて寝た振りをしながら、私は考えにふけてゐた。

屋敷内に内通者がゐる事は疑いようがない。でなければ昨日の鮮やかな手口の説明がつかない。

昨夜の時点で康行は侵入者に気付かなかつた。他の侍や下人達もそつだ。それなのに賊は姫君の寝所にやすやすと侵入してきた。これは身分の低い者が手引きをしたぐらいでは、出来ることではない。

私がゐる姫君様のお休みになる場所は、寝所の建物の中でも一層奥まつた所に用意されてゐる。縁に近い庭先の周辺の片方は女房達の宿泊する局が取り囲んでゐるし、もう一方は高い堀から林の様な木々に囲まれた奥の庭に面してゐるので、外部からはかなりの距離がある。しかも今はそのいたるところに侍達が見回つてゐるのだ。

昨夜御格子が開けられてゐたのは女房達の局の近くだつた。女人とはいへ、大勢の人が休んでゐる目の前を、まして定期的に見回りがある中を、間隙を突いて寝所の奥まで入つてきたのだ。

御格子はうちから掛金をかける仕組みになつてゐる。それが外さ

れて開けられていた。これは普通に考えて、下男、下女には入れない、寝所の姫君の部屋の内側から、女房の誰かが掛金を外し、賊を招き入れた可能性が高い。

そうなると自分の同僚である女房達が、全て疑いの対象になってしまう。やすらぎが相手にしている、普段見知った女房達の声聞きながら、裏切り者はあの人だろうか？ この人だろうか？ と考えるのは気分の良い物ではない。

当然女房達も同じように思っているらしく、寝所の中には重苦しい空気が流れている。

中には私がいれば真っ先に疑うところだったが、宿下がりしているのでは疑う事が出来ないと、やすらぎにこぼす人までいた。私がない時にはこんな風に噂をしているのかと、腹が立つやら、あきれるやらである。

それを聞き咎めた桜子が私をかばってくれたりして、ああ、こんな時に人柄というのは分かるものだなあ、なんて思ったりする。

結局その日は何事も起こらず、夜も一晩中警備の侍達の気配とたいまつの明かりの絶える事のないまま夜明けを迎えた。

夜が明けるといよいよ姫君様のご結婚の日を迎えた。入れ代っている私としては、朝から緊張の真っ只中にいた。

まず、偽物だとバレないように気を使わなくてはならない。さすがに結婚当日となると、姿は見せないとはいえ様子をうかがう女房達に気取られないように姫様のしぐさや癖を真似ながら気配を漂わ

せなければならぬ。

中納言様のご挨拶は奥でじつとしたままやすらぎに任せておけばよかつた。しかし、北の方が見えられると、母子としての振る舞いに気を配らなくてはならぬ。

出来るだけの演技はしたつもりだが、御簾の向こうではどのような気配に感じられたのかヒヤヒヤものだった。姫の妹君もおこしになり、声を立てずにそつと談笑しているふりをする。二の姫とは初対面だというのに。

二の姫はおん年十二歳になる少女なので、今度の件は事情を理解できている。だから不安を隠しきることはできず、心細そうな表情をしながらも、姉の無事をしきりに案じ私にお礼を言ってくださっていた。

私はかしこまることもできずに、ただ、うなずきを繰り返すしかなかった。

そして日が落ちると大将様は約束の時間通りにお見えになられた。当然、そつと忍んでこられることになるので、この部屋の周辺は人払いが行われて、警備も人の気配も薄くなってしまう。

賊が狙うには絶好の機会だろうし、大将様がどんな心積りでおこしになるのかも分からない。さすがの私もここへきて身代わりになった事をちよつとだけ後悔してしまう。

こうなつたらせめて大将様に言いたい事だけは言わせてもらおう。

身分が低い者にも、それ相応の誇りがある事を知っていただこう。これだけ大将様の思惑どおりに振り回されたのだから、これ以上いになりになる必要はないはずだ。何が起ころうとも自分の意思だけはきちんと伝えたい。狙われた邸に通うのだからあちらも命懸けかもしれないが、こつちだつて一生がかかっているんだから。

忍びやかな人の気配がして、こつちに近付いてきた。大将様だ。私は頭を低くしてかしまる。

「これはこれは。そんなにかしまることはありませんよ。今宵、私はあなたの夫としてここに伺ったのですから」

大将様は楽しげにおっしゃるが、こつちはそれどころじゃない。

「おとといの晩、私は姫様の代わりに連れ去られそうになりました。おそらくこの屋敷の中に内通者がいると思われれます。大将様も狙われているかもしれません」

「それはあなたもですね。よく、こんな無理な事を引き受けて下さいました。まして恐ろしい目にあわれたというのに、あなたは逃げ出しもせずきちんと身代わりの役目を勤めて下さっている。心から感謝していますよ」

「大将様のためではありません。申し訳ございませんが、私は姫君様のために今ここにいます。姫様と大将様が無事に結ばれる事を願って、この役目を引き受けているのでございます。姫様に見出していただかなければ私は下働きの下女として、この屋敷の庭先を駆け回っていたことでしょう。ひよつとしたら田舎につき返されて、成り上がり者の娘が馬鹿な夢を見た、と、笑い者になっていたかもしれませぬ。姫様あつての私なのです。私は姫様が好き

で、このお邸が好きで、だからこそ、こんな役目を引き受けているのでございます」

大将様に顔を見られて、中納言様に見下げられて、仕方なくここにいるのではない。私は自分の意思と、姫様への感謝、もつと言えば、この邸に勤める事が出来て、色々な人達と友情を育む事が出来ている事に感謝しているからこそ、ここにいるのだという事を大将様に知って頂きたかった。それさえ知っていて頂ければ、この先世間がどう言っても自分が自分の心のうちの誇りは守られるような気がしたのだ。

大将様は私の顔を上げさせ、深くうなずいて下さった。

「あなたには、初めに私が考えていた以上に色々な難題を強いてしまったようです。初め、私が姫の身代わりを考えた時は、妹姫の二の姫や、やすらぎの事を考えました。しかし二の姫では万が一連れ去られてもすれば、今度は中納言家の人質にされてしまう。中納言殿は今、検非違使（現在の警察の様な組織）の強化に積極的で、前の帝に煙たがられている。今度の件もその流れで起こっている事なのです。やすらぎは姫の事を誰よりも思っている乳姉妹だから口外される心配が無い。だからお付きの女房として偽物の姫を守る役目に回ってもらった方がいい。そんな時に康行からあなたが夜、局の近くで琴を弾いている話を聞いたのです。あなたの人となりは康行から聞いていましたし、裕福な環境で育ったあなたは下手な貧窮した貴人の娘よりも精神的に余裕がある。いささか粗忽な所はありのようですが」

ここで大将様はクスリと笑みを漏らされる。私が扇を落とした事を思い出したのだろう。

「このような方なら、うろたえることなく、事情を呑み込んで下さると私は思ったのです。本来なら昨日で本物の姫と入れ替わっていただくつもりだったのですが、何故か増築の進捗状況が外部に漏れ出して、前帝の動きが怪しくなってきた。仕方なくあなたには三日夜の宴までここに残っていただく事になってしまったのです」

成程。私が今日、ここにいないではなくなっただのは、突発的な事情からだっただのか。それに実際に私は襲われている。大将様のご判断は正しかったのだろう。

中納言様は私に対して軽侮の念があった。これは疑いようがない。しかし、大将様の今の様子に私を軽んじられているような気配は感じられない。

「あなたが襲われたと聞いた時は本当に申し訳ないと思いました。てつきり私はあなたが康行やあなたの父親を頼って逃げていくものと思っていましたし、それも仕方がないと思いました。しかしあなたはそうしなかった。それどころか私の妻になる人のために命を張ると言って下さったそうですね。私はどれほどあなたに感謝しているか」

大将様が頭を下げられる。

「そんな、もつたいない」

私は本当に恐縮してしまう。正直なところ、この場だけ手をつけられて、御結婚後は捨て置かれるか、最悪、適当な理由をつけられて郷里に返されるかと内心ハラハラしていたのだ。

「これはあなた次第なのですが、こういうことになったのも何かの縁。もしよかつたら私の感謝の気持ちとして、私の妻になっていただけませんか？ あなたのこの一族の事は一生面倒見させていただきますよ」

私は目を丸くする。ちよつと待った。話しがこういう方へ行くとは思っていなかった。

男君は何人の妻をめぐつてもかまわない。もちろん主流の本妻はお一人になるが、社会的地位はどの妻も平等に与えられる。正式にお披露目のない愛人や、手近な女房に情けをかける情人とは訳が違う。妻はあくまでも妻なのだ。だから全ての妻に同じ格式が与えられるので、他の妻の家が良くなり、どうしても足を運べなくなると離婚ということもありえる。そうなつては困るので、夫を通わせる妻の家は邸中を上げて夫をもてなし、世話をするのである。

ただ、それだけの経済力をかけて夫の世話をするのだから、夫になる人の身分や出世はそれ相応の物が求められる。身分が低く、出世の目が出ない男君は妻を一人持つのも大変だし、逆に家柄もよく出世街道まっしぐらな殿方は、各家から引く手あまたの申し出がある。大将様はまぎれもなく後者で、都中の権門の家が狙っている方だ。それに私と大将様とでは身分に大きな開きがある。この場合、たとえ私の家が裕福だといつても、大将様が私の家から経済的援助を求めることは無いだろう。その上で社会的、政治的援助は受ける事が出来るのだ。

大将様は一族を一生面倒見ると言った。額面通りに受け取るのなら、たとえ夜がれる事になつても、離婚はせずに私の一族の面倒

を見続けて下さるといふ事になる。女人なら一度は夢見る、大変な名誉だ。

普通なら断らない。一族の事を思うなら、断れない。女の身の大出せだ。私はぼーっとなつてしまった。

大将様の感謝の念は本物だ。でなければ口が裂けても言っていない言葉じゃない。けれど。

私は大将様から視線をそらした。姫君様の調度品が目に入る。そうだ、ここは姫様の寝所なんだ。

「その感謝は姫君様に捧げて下さいませんか？ さつきも申しあげたとおり、私は姫君様のためにここにいます。自分の出世のためではありません。そのお気持ちだけで結構です」

私はあらためて頭を深く下げた。さつきは自らの矜持から出た色合いの濃い言葉だったが、今は姫様への想いが言わせた言葉だった。

「姫君には実は了解を得ている。あなたがどれほど命をかけているのか姫君は知っておられる。私は身分がらまだまだ妻が増えていくそれならば人柄の分からぬ姫よりも、あなたの様な方に感謝の気持ちを伝えたい。それを姫君も理解してくれている。その上での申し出なのです。受けて下さいませんか？」

勝手に話をすすめられても困る！ 私が妻になれば姫君様は私と友情を結んで下さるのが難しくなる。いや、あの姫様なら自分のお苦しみを胸におさめて、私を暖かく見守って下さるかもしれないが、私は姫様をそんな立ち場に追いやりたくない！ やすらぎにだって顔を合わせる事が出来ない！

大将様は物慣れた様子で私ににじり寄ってこられる。私の袴の裾を膝で押さえている。普段女房や女君の相手で、この手のしぐさには慣れていらっしやるのだろう。私は思わず身を引いてしまった。それを見た大将様が膝から袴を放す。その拍子に私の懐からころりと何かが落ちた。櫛だ。康行が縁に置いて行った櫛。

お文

私は姫様の御櫛を使うのが申し訳なくて、この櫛を懐に入れていたのだ。中将様はそれをじつとご覧になった。

「康行。どこに隠れている？」

大将様がどこへともなくそう、お声をかけられた。

すると塗籠の中から何と康行が現れた。なんでここにいるのだろう？

「今日の私は振られたようだ。夜が明けるまで部屋を出ることはできないが、ここにいる事もはばかれる。お前はここで姫君を守っていなさい。私は塗籠で休ませてもらおう」

そう言つて大将様は少し微笑まれながら塗籠の中にこもられてしまった。

「やすらぎさんが俺を通してくれた。若君に言われていたらしい。さすがに今夜は人すくなくなってしまふから、寢所の中で賊が侵入しないか、見張っているように言われていたんだ」

康行はうつむいたままそういった。

私は顔も上げられずに「そう」とだけ言った。

「俺は御格子のそばにいる。御簾の中には入らないから、安心してくれ」

安心？ 何が安心だというの？ こんなやり取りの後で、康行に全部聞かれてしまっていて、何処をどう安心しろって言うのよ。私は何故だか泣きたい様な気持ちを抑えるだけで精いっぱいだった。

塗籠の中から時々衣擦れの音が聞こえる。大将様は起きていらっしやるようだ。康行は私に背を向けて御格子の方を見ているらしい。固まったようにピクリともしない。緊張しているのだろう。

その夜は三人三様が、まんじりともせず夜を明かした。賊が侵入した気配はないようだった。

夜が明ける頃、大将様は塗籠からお出になられて、康行に寢所から出るように促した。侍が建物の中にいたと知れたら厄介だからだ。中将様ご自身も帰り支度をなされる。康行はやすらぎに掛金を外してもらった御格子から外へと出ていった。帰り際に大将様がおっしゃった。

「あの櫛は康行からもらったものですね？」

「……はい」

康行はこの櫛を大将様にお見せして、良いものだといわれたと言っていた。大将様もすぐにお気づきになった。

「あの男は優しい男です。あなた達は真つ直ぐに目を見て話してお互いを知る事が出来るのですね。私などは女人と目を見かわせれば、そこですべてが決まってしまう。そうできなかったのは、あなたが初めてです」

公達に顔を見せて目を合わせれば、それは互いに関係を結ぶ条件の様なもの。女人は顔を隠すか、全てを受け入れるか二つに一つしか道が無い。それはどれほど不自由な事なんだろう。

「たしかに彼の身分は低いが、彼には馬を育てる才能が飛びぬけている。地元でも馬を売ってそれなりの生活が出来ているはずですよ。彼もあなたと同じように私のために身体を張って警護を務めてくれている。彼なら馬の世話だけで、十分暮らせるはずなのだが。彼もあなたと同じなのですよ」

「私と、ですか？」

「ええ、彼も五年ほど前に大納言家に初めて勤めに来ました。馬の事だけでも十分なのに、彼は気の合う私のために、懸命に使えて、性に合わぬであろう侍者となって私を守ってくれています。彼はあなたを昔の自分に重ねてしまい、放ってはおけないのですよ」

そうか。だからここでの手当てをまるきり私の櫛につき込んだり出来たんだわ。康行は決して経済的に苦しい立場ではないんだ。何度も都に訪れるのは、お金のためだけではなく大將様への友情があるんだわ。私が姫様を気に留めているように、康行は大將様を気に留めているんだ。

「正直、あなたの方が私は羨ましくなる事があります。真っ直ぐに見つめあって、真っ直ぐな言葉をかけあう。私には望めない事です」
大將様は軽くため息をおつきになった。

「後で後朝の文を差し上げますが、あなたは読んで下さるでしょうか？」

後朝の文とは、男女が契りを交わした後に贈りあう手紙の事である。本来なら新婚の朝には、当然送りあうのだが、私達はどうすればよいのだろう。勿論、姫様が書き残していかれた儀礼的な文は用意してある。表面上はこれを贈りあわない訳にはいかない。今、大將様がおっしゃっているのは、結婚を示唆された私に対してのお文の話だろう。私はこのお話に一言もお返事を差し上げていないのだ。

「返事を急ぐのはやめましょう。私もあせるつもりはない。では、今宵、またお会いしましょう」

そう言って大將様は朝霧の立ち込める中に姿を消してしまわれた。

その日、私はぼんやりとしたままため息がちに過ごしていた。やすらぎも私に声をかけてはこない。

康行や大將様が出ていく時の様子から、何か察するところがあったのだろう。私も口を開く気にはとてもなれない。

朝食もろくに取らずにいると、大將様から後朝の文が来た。開くと姫様宛のきちんとしたお文の中から、小さく折りたたまれた、もう一つの文が出て来た。私宛のお文だろう。

「藤なみのまだ咲かぬ夜ほととぎす鳴くべき時を今だ知るらむ」

万葉の古歌にかけていらっしやる、歌だった。

元の歌は「藤なみの咲きゆく見ればほととぎす鳴くべき時に近づ

きにけり」という、古くからの有名な歌だ。藤は「花房」という私の名前を現している。実際私の名前は藤にちなんでつけられている。生まれた時には満開だったそうだ。

ほととぎすは藤に寄り添って鳴くもの。遠い昔からの取り合わせで、中将様が私に言い寄る様子を現している。しかし、恋の花は昨夜咲くことは無かった。そもそも藤は夏の花。今はまだ春の初めだが、ほととぎすはいつ鳴けばよいのですか？ そんな意味あいの歌だ。

流石に手なれた読みぶり、私の名にかけ、季節をわざとずらしたお歌。筆跡も墨の濃さ、淡さ、かすれ加減まで良く整えられた美しい文字だ。全体に品格が漂っている。私などが太刀打ちできるお歌ではない。

それでもこれだけきちんとしたお歌を大将様は送って下された。昨夜の言葉はその場の勢いではないとおっしゃっているのだ。これに返事をしないのは、あまりに失礼だろう。仕方なく私も返事を書いた。

「わがやどのいけのふじなみ」

女のかな文字、しかも決して筆跡は美しくない。まして芸術的品位を添えるなんて逆立ちしたって私にはできない。

だから、せめてやわらかい文字で丁寧に、女の最低限の教養と言われる「古今集」の歌の、はじめりの部分だけを書いた。この後には藤の花が咲いた、いつかは山からほととぎすが鳴きにくるだろう。という意味が続く。あくまでも花が咲けば、という意味も込めて私はその部分をわざと書かずに表現をぼかしたのだ。歌は苦手でもそ

の程度のたしなみはある。大将様ほどの方なら、これで通じるだろう。

この文を私も大将様のように姫君の御手紙の中に小さく畳んで添える。奇妙なやり取りだ。

朝食をあまり食べなかつたので、やすらぎが「体によくはないから」と、暖かい甘蔓の湯（甘い飲み物）と柑子みかんを用意するように言ってくれた。暖かい物は心を落ち着けてくれる。

ところが柑子を口にしようとする、指先が思うように動かない。良く見るとやすらぎや他の女房も様子がおかしい。ここに来て私は甘蔓の湯に何かが混ぜられた事に気がついた。身体はすでに軽くしびれていて動かせない。どうやら隙を狙うには警護が厳しくなりすぎて、内通者が思い切って一服盛ったらしい。油断した。

白昼堂々と、こんな荒っぽい手口に出るとは思っていなかった。私は前のめりに伏せつたまま動けなくなってしまう、誰かに大きな布をかぶせられた。どうやら、袋のようだ。そのまましばらくは引きずられ、途中から担ぎあげられる。

外がだんだん騒がしくなる。どうやら下人達が出入りするところまで来たらしい。助けを呼びたいが声が出ない。身体のしびれもひどくなる一方だ。ついには外に連れ出されてしまったようで、物売りの声なども聞こえる。私はしびれる身体を必死に動かし、懐から康行の櫛を出した。

袋の隙間を探り、思い切って外に放り投げる。地面にカラリとモノの落ちた音がした。私は牛車か何かに荷物のように放りこまれ、だんだん意識が遠くなっていった。

康行。落とした櫛に気付いてくれたら、あんたを少しは見直すわ。

最後にそんな事を思った。

目が覚めるとひどく頭が痛かった。身体もまだ少ししびれているようだ。薬の影響があるのだろう。身体を起こし、回りを見回すと農作業の小屋の様な所にいる事に気がついた。都からは大分離れてしまったのだろうか？

反対側に振り向くと、そこに桜子がいた。

「気がついた？ 大丈夫？」

「大丈夫。少し頭が痛むけど。桜子さんも連れてこられたの？」

「そうみたい。気が付いたらここにいたの。ねえ、何故あなたがお屋敷にいたの？ 姫君様はどうしたの？」

そうか、桜子は事情を知らないんだっけ。

「実は中納言様に頼まれて姫様と私は入れ代っていたのよ。姫様が何処にいらっしやるのかは私も知らないの。知らなくて良かったわ。こんな事になるのなら」

私は痛む頭を押さえながら答えた。まだ少しぼんやりとしている。

「そうだったの。あの、とても申し訳なかつたんだけど、これがあなたの懐から出てきていたの。私、つい読んでしまつて」

桜子は大将様のお歌のお文を手にしてた。櫛を落とそうとした時に出て来てしまつたのだらう。

「このお手つて、もしかして大将様のものじゃないの？ あなた大將様と何かあつたの？」

この状況で隠しても仕方がないだらう。

「私に結婚を申し込まれたの。感謝の気持ちだと言つて下さつて」

桜子が驚いた表情で私を見つめる。そりゃあそうだらう。私だつて実感がなくらいだ。

「じゃあ、まだあなたには利用価値があるのね」

桜子の様子が変わった。利用価値？ どういうことだらう？

そう思つて桜子の手紙を持つ手を見てみると、その手のひらの傷に気がついた。何かにかみつかれたような……。

私ははっとした。前に連れ去られかけた時に、私は思いつきり相手にかみついた。一人はうめき声で男と分かつたが、あの時もう一人いたはずだ。あの、闇の中にいたのは桜子だったのか？

「あなたが内通者だったの？」 私は驚いて桜子を見つめていた。

人質

桜子はとっさに手の傷を隠そうとしたが、私の目を見ると「ふつ」とあきらめたような表情をして、私に文を返してきた。

「ついにお気づきになったのね」

まるでため息のように言う。

「何故あなたが姫様を裏切るような事を……」

私はまだ信じられない。こんなに人が良くて優しい人柄の人が、自分の主人を裏切るとは思えなかった。

「あなたには分からないわ。豊かな国で自由に育った人に私の気持ちちは」

桜子は私の前で胸を張るしぐさをする。

私には薬の影響が残っていて、身体が利かなくなった。どうしてもうつむきがちになる。

姿勢は人の心に影響する。こんな状況では受ける影響も大きい。

私は桜子に支配されてしまったような錯覚を起こしていた。これも薬の作用なのだろうか？

「あなたは武蔵の国の出だったわね。山があり、広い平野があり、温暖な気候に恵まれた国。私の暮らした越後とは大違いだわ。一年の半分近くは雪に閉ざされ、その雪が時には人の暮らす家さえも押しつぶしてしまう。豊作に恵まれればよいけれど、夏の実に恵まれないければ長い冬に閉ざされてどうすることもできなくなる国。私の父はそんな国の国司になった」

桜子は遠い目をして自分の暮らした国を語る。

「本来なら父は若狭のようなもつと豊かな国の国司になれるはずだった。それなのにあの、帝の急な退位がきつかけで任地が越後に変更されたわ。武蔵や相模、東もあらえびすの国といわれているけれども、それより越後はもつと遠い国。そんな国の国司に父は突然据えられてしまったのよ。それでも父は国司としての務めに励んだわ。けれども運が悪いのか、父が赴任した後の越後は凶作が続いてしまった。そして冬には雪に閉じ込められる。私達はどれほど都を恋しく思い、苦しい思いをしたか、あなたには分からない」

桜子は立ち上がり、まだ体の自由が戻りきらない私を見降ろしている。

「私は父の任地が変わったら、都に戻って結婚することになっていった。しかし父は凶作の影響と、その対策に追われてなかなか都には戻れなかった。その時の越後は飢えと寒さで餓死する者も多かったから」

桜子は私に意地の悪い視線を送る。

「あなた、知ってる？ 京の街にもたくさんの餓死者がいる事を。あなたは牛車に乗って都大路を眺めるだけでしょうけれども、その路地を一步入れば道端にはたくさんの子供の死骸が転がっているのよ。そして何日かすると役人達が死骸を集めて烏野辺で、まとめて焼くの。それも茶毘に伏すんじゃなくて疫病が起こって高貴な方々にうつつたりしないように、まるで物のように焼かれるのよ」

桜子は私の顔色が変わるのを楽しむように眺めている。普段とは別人の様な顔つき。

「父が私に選んだ結婚の相手は、そんな仕事をしている役人だった。それでもその男はさる高貴なお方にお仕えしていて、前途は有望だったから父は私にその男との結婚を望んでいたの。ところが父が都に戻れなくなつた事をいい事に、向こうは私よりも家柄のいい姫と結婚してしまつた」

桜子の表情に、一瞬の陰りが浮かぶ。しかしその影はすぐに消え、私を見下す表情に戻る。

「若い姫様が吉野で子供に情けをかけた話しなんて、私から見れば偽善もいいところ。虫唾が走るわ。たまたま姫様の目にとまつただけのその子が良い目を一時見ただけで、日常の中でどれほどの貧しい人たちが死んで行っているか、誰も気に留めずにいるのよ。あなた、誰にも振り返られず、打ち捨てられる気持ち分かる？ 越後に放っておかれてしまつた、私達のような者の気持ちがある。なのに役人は威張りかえり、人々は見えて見ぬふりをするばかり。中納言様達は、その役人の力をより強くしようとしている。検非違使を増員したり、彼らの地位を上げようとしていたりしているの」

桜子の目の色が変わる。私に対してねたみと憎しみをぶつけて来る目だ。

「私が中納言家に勤めに出たのはあなたの様な行儀見習いと違うわ。親に迷惑をかけないように、結婚相手が決まるまで、自分が自立をする為に勤めに出たの。あなた達は都見物の延長の様なものだろうけれど、私は違う。自分で身を立て、自らの夫となる人を得るために勤めに出たの。それなのにまあ」

桜子は私に返した手紙を睨みつける。

「人によって、運つてこころも違うものなのね。自分の力で生きる他にない、私のような者には誇りを踏みにじられるような事ばかりが起るのに、身分はずつと下でも恵まれて甘やかされてきたあなたのような人に、大将様からのそんなお文が来るなんて。本当に不公平だわ」

「でも、それでも姫君様達には何の罪もないじゃないの。お二人ともご自分が与えられた中で、精いっぱい生きようとしているだけじゃないの」

私は喘ぐように言う。今や薬の毒毛よりも、桜子の言葉の毒に私は苦しめられていた。

「そうね。姫様達には関係ないことかもしれない。それでも私は大納言家と中納言家がこれ以上繋がり深くして、力をつけていくことが許せないの。彼らが下々の者を見る時はいつも傲慢だわ。前の帝の味方をしたい訳ではないけれど、今の帝や貴族の人たちの鼻を一度は明かしてみたいのよ。この結婚を失敗させて両家に溝を作り、役人ばかりが威張りかえる今の状態を壊してみたい」

思い出す、中納言様が私に入れ替わりを依頼した時の見下した態度。言葉は丁寧であったが、そこにはインギン無礼な匂いがあった。きつと下々の誰もが大人り小なり一度はこんな思いを味わっているだけだ

「それは世間へのやつあたりだね。あなたや前の帝がやっているような事で世の中が変わるとは思えない。もし変わったとしても、今度は帝の首を挿げ替えられるだけで、また、誰かの思うがままの世の中になるだけ。こんなことでも誰も幸せにならないわ。あなたは姫様が不幸になってもいいというの？」

桜子は私にじっと視線を向ける。そして挑戦的に言う。

「私は姫様やあなたの不幸を心から望んでいるの。私と同じ苦しみを味わうことをね。あなた、少し言葉に気をつけた方がいいわよ。あなたの命運は、今、私達の手の中に有るんだから」

桜子の目は何処までも冷たい。あの、人の良い笑顔の下にこんな目の色を今まで隠していたのだろうか？

「良かったわね。あなたにはまだ利用価値があるわ。殺されずには済みそうじゃない？ 大将様のお気持ちの本物なら、あなたをこのまま捨て置くことはできないはず。でも、やっぱり初瀬の観音様くらいには祈っておいた方がいいかもしれないわ。高貴な方って気まぐれな方が多いから」

「私を大将様への人質にするつもり？」

「すぐに殺されなかっただけでもありがたいと思ってね。二セの姫君様」

桜子はそう言って小屋の戸をあけて出て行ってしまふ。私は何とか体を引きずるようにしてその戸に向かって行くが、当然戸には鍵がかけられていた。私はその場に横たわった。これ以上無駄に体力を消耗できない。

身体のしびれは残っているが、頭はかなりはつきりしてきた。もうしばらく待てばしびれも治まるに違いない。薬の効果は間違いなく薄れてきている。

やすらぎ達も同じ薬に苦しめられているはず。屋敷の中とはいえ、薬の効き方にも個人差があるだろうし。やすらぎは大丈夫かしら？

桜子の考え方は間違っている。これは世の中への仕返しなんかじゃない。自らの不運を嘆き、幸せをつかもうとする努力をあきらめただけの泣きごとでしかない。ただのやつあたりだ。

そうは思う一方で、私は北国の厳しい暮らしを知らない。南国の激しい疫病の襲ってくるさまも、恐ろしい海辺の嵐も、深い雪に閉じ込められる息苦しさも経験したことはない。桜子のような人の、苦しみを理解することは出来ない。

桜子の様な不満を持つ者が、この国にはどれほど多くいるのだろうか？その考え方を弱いと切って捨ててよいのだろうか？ 私は気が弱くなっていく。

いけない。桜子の言葉に吞まれてしまっている。

だんだん身体に力が戻ってきた。しびれも感じなくなっていく。身体の内を取り戻すと、心の強さも取り戻す事が出来るようだ。そうよ、こんな理不尽な憎しみなんかには負けちゃいけない。

姫様は周りがどうあるうが、優しく生きていく覚悟を決めてらっしゃる。世の中にはこんな憎しみの感情が渦巻いている事も、きつと知っていらっしゃるのだろう。その姫様を守り続けることをやすらぎは覚悟している。大將様だって自分の出来うる限りの生き方をしてらっしゃる。私に感謝もしてくれている。

父は私に愛情を持って育ててくれた。康行だって私を気に掛け続けてくれている。桜子にだってこうした身近な愛情や友情があったはずなのだ。憎しみでその目を曇らせてしまったただけ。

私は負けない。私を愛してくれる人々がいる限り、つまらない憎しみの悪意になんか負けていられない。

このまま人質として利用されたくなんかない。何とかしてここを抜けだすことは出来ないだろうか？

高い所に小さな窓がある。私はやっと動くようになった身体を精いっぱい伸ばして、外の様子を見ようとす。

外には見張りがいた。侍崩れのような郎党が二人、扉とこの窓を見張っている。普通の手段では逃げ出せそうにない。周りは広い田園で、外に出てもすぐに身を隠せそうなところは無い。どうしようか？

すると何処からか、ごく小さなささやき声が聞こえて来た。

「花房、花房」

私の名前を呼んでいる。

声のする方にそっと近付いて見る。板張りの小屋の、木目の小さ

な節穴から聞こえてくるらしい。

「薬を盛られたそうだな。大丈夫か？」

康行だ。康行の音がする。私は心から安堵した。

「大丈夫よ。よく、ここが解ったわね？」

私も小声でささやき返す。

「あの櫛はお前がわざと落としたんだろう？流石はじゃじゃ馬、こ
ういう時に、はすっこい奴だ。良くやった。櫛の先に車のあとがあ
った。それを馬で追って来たんだ。お前何とかここから出られない
か？」

「馬があるの？ 私も乗せられる？」

「この向こうに小さな林がある。馬はそこにつないであるんだ。二
人なら十分に乗れるさ」

逃げ切れるかもしれない。心の中に一気に希望が湧いてきた。

「何とかするわ。でも反対側に見張りが二人いるの。一人は気をそ
らすわ。もう一人は康行で何とかできない？」

「やってみよう。なるべく騒ぎを起こしたくない。外に出たら林に
向かって全力で走るんだ。俺もすぐに追いつくから振り返らずにま
っすぐ走るんだぞ」

康行はそういうと、じっと息を殺していた。

約束

私はまた戸口に向かって行った。その戸を両手でトントンと叩く。

「誰か、誰かいますか？」

なるべくしおらしい声を立てる。少しでも油断を誘わないといけない。

「どうした？」

男の野太い声が返って来た。

「ひどく気分が悪いんです。お水を飲ませていただけませんか？」

「ここを開ける訳にはいかない。そのくらい我慢しろ」

男はすげなく答える。

「でも、私、薬を盛られてからずっと気分が悪いんです。のどが渴いて、胸もつかえているの。私はまだ人質としての価値があるんでしょう？ 私の身に何かあったらあなたも困るんじゃないの？ お願いします。お水を一杯だけ……」

私はわざと消え入るような声を立てた。

「ちょっと待っている」

そう言っただけで男はその場から離れたようだ。代わりにもう一人の男が窓辺から戸口へと移っていく気配がする。女相手でもなかなか油断はしてくれないようだ。

しばらく待っていると戸が開けられて男が木の椀に入った水を差

しだしてきた。

「今、ここで飲め」

どうやら二人掛かりで見張るつもりらしい。私はゆっくりと水を口に含んだ。

私は途中で腕から口を放すと、着物のひもを緩めて下着と袴だけの姿になる。

「すこし、向こうを向いてもらえませんか？ 胸が苦しいので」

「それはできない。こんなところに連れてこられたのが不運と思っ
てあきらめるんだな」

男二人はかえってニヤニヤと薄笑いを浮かべている。私はもう一度水を口に含む。

私は顔をあげて男の目に水を吹きかけた。もう一人の男に腕を投げつけると、全力で駆け出した。

私を追いかけようとする男に、康行が飛び出して来てみぞおちに宛て身を食らわすのが見えた。私は林がある方角を確認しようとする。そこにもう一人の男が刀を持って私に斬りかかるうとする。殺しさえしなければ、腕の一本くらい斬り落としても良い気であるの
だろう。

康行も刀を抜いて男に斬りかかる。私は必死に逃げていく。向こうに林がある事にようやく気がついた。

刀を合わせる音がして思わず振り返る。次の瞬間康行が男に斬りかかっていた。私は目をつむって走り続ける。下着と袴だけなので

身体はだいぶ動かしやすいが、全力で走ることなど普段は無いので、すぐに息が切れて来る。それでも懸命に走るとどうにか林の中にとどり着く事が出来た。康行も追いついてきた。

「無事か？」

康行が聞いてきた。

「ええ、無事よ。……斬ったの？」

私は戸惑った。康行が人を斬るのをはじめて見てしまった。

「斬った。仕方なかったんだ。あのままではこっちが危なかった」

見ると康行は少し震えていた。全身の気が立ったような気配を感じさせている。

「大丈夫なの？ 康行」

「人を斬れば平気じゃいられないさ。俺は度胸がないんでね。しかしこれが俺の仕事だ。大丈夫、心配するな」

そう言っつて康行は林の奥から馬を引いてきた。私を抱き上げて乗るのを手伝ってくれる。

「暖かいのね。馬って」

こんな時に間が抜けた言葉だとは思ったが、思わず口に登った。

「生きているんだから当然だ。生き物のぬくもりは心を安らげてくれる。だが、今は気を張っていてくれ。大納言家に辿り着かなければならない」

康行も私の後ろに乗り込んだ。すこし、血の匂いがする。返り血だろう。

「子供の頃の願いが叶ったんだ。少し揺れがきついかもしれないが、しっかり掴まっていてくれよ」

そういつが早いか、康行が足を動かしたとたんに、馬は矢のように駆け出していた。

激しく揺れる馬の背で、康行に半ば抱えられるようにしながら私は馬の首にしがみついていた。そして康行が言った言葉を考える。子供の頃？ 願い？ 昔、何かあったっけ？

馬、厩。そうだ、私がほんの小さな頃に子馬の出産を見せてもらった事があった。

私が幼女の頃、子馬が生まれると聞いて私は父にせがんで厩を覗かせてもらった。ところが腹の子は逆子だったらしく、母馬は大変な難産になってしまった。私は父の腕にしがみついて脅えながら様子を見ていた。

そうだ、そこに確か少年がいた。その子は馬の世話をしている下男の子だったと思う。

「大丈夫だ。父ちゃんは必ず無事に産ませるよ。こういつことには慣れているんだ」

そういいながら父親の手伝いをしていたっけ。少年は母馬の腹を

さすつてやり、父親は出て来た子馬の足を懸命に引つ張っていた。

子馬は無事に生まれ落ち、必死に立ち上がった。母馬は子馬をずっと舐め続けていた。可愛い子馬だった。

私はその子馬が欲しいと父にせがんだが、この馬は後に都の若君に買われていくのだといわれた。

「こんなによろよろしているのに」
「なんだかわいそうに見えた。」

「父ちゃんが育てる馬はみんな立派に育つんだ。この子馬だって二年もすれば大きくて立派な馬になる。それにお前のお父様はお前が馬に乗るよりも、都のお姫様みたいになる方が喜ぶ」

「都のお姫様？ 亡くなったお母様みたいに？ でも私は馬に乗ってみたいわ」

けんもほろろな父をあきらめ、私は少年にせがんだ。

「お前は小さすぎて危ないよ。それならお前が大きくなってお姫様の様になつたら、俺が馬に乗せてやるよ」

「本当？ それなら私も都のお姫様になる。そうしたら私に馬を頂戴。この子馬みたいな可愛い馬を」

「お姫様に馬は似合わないよ。その代わりにもっと綺麗なものをやるよ」

「それなら私に櫛を頂戴。お母様の櫛はとっても綺麗なよ。漆で

綺麗な時絵が書いてあるの。あんな櫛なら私も欲しいわ」

「分かったよ。俺が大人になったら櫛を買ってやる。馬にも乗せてやる。だからこの子馬は若君に譲ってくれ」

「ええ、我慢するわ。でも、櫛も馬に乗せてくれるのも忘れないでね。約束よ」

約束。そうだ、その時少年とかわした約束。今思えば、あの少年は康行ではなかったか？

そして私は都人になる事を夢見て暮らし、厩に近付くことは無くなった。少年の事も忘れてしまった。もうあれから十年ほど経つだろう。

康行は私に櫛を買ってくれた。馬にも乗せてくれた。私がすっかり忘れていた約束を、康行は果してくれた。

私はお姫様のようにではなく、薄汚れた下着姿で、康行は返り血を浴びて異様な状態になっているけれど、それでも遠い日の約束は、今、果たされたんだわ。

馬の首にしがみつきながら、私は康行を仰ぎ見る。真剣な顔で馬を操っている。もう、震えてはいなかった。

馬はまるで飛ぶように田園の中を駆け抜けていく……

しばらく走り続けると目の前に桂川が見えて来た。意外と都は近かったようだ。橋を渡ると向こうに馬の集団が見えた。奥には男車の牛車もある。私達の姿を見ると、牛車の中から大将様が顔を出した。

「康行！ 花房は無事か？」

大将様がお声をかける。

康行は慌てて馬から降り、私を抱き下ろしてくれた。そのまま地面にかしこまる。大将様は私の姿を見ると

「おお、無事であったか。康行、よくやった。花房はこちらの車に乗りなさい。その姿では身体が冷える」

そう言って私にご自分の着物をはおらせて下さる。

「大丈夫です。それよりも、検非違使の役人に、以前越後の守の娘と結婚話の持ちあがった方はおられませんか？ 鳥辺野送りにかわる方で」

私は大将様にお聞きした。

「ああ、そういえば以前そんな話があったな。たしか私の叔父の元につかえている男だったと思うが」

「越後の守の娘が内通者でした。彼女の父君が都に戻れなくなり、彼女の結婚もその役人に一方的に流されてしまったようです。そういった事が重なって、大納言家や中納言家に恨みを抱いていたようです」

「そうでしたか。これから康行に場所を聞き、あなたをさらった者

達を取り押さえに行かせます。もう、大丈夫なのですよ。安心なさい」

「違うんです。越後の守の娘は、桜子さんは、ただ、捕まえて処罰を受けるだけではダメなんです。父君が都に戻れなかった苦しみ、結婚を裏切られ、誇りを踏みにじられた苦しみを、中納言様やその役人に知っていたただかなければ、何らかの遺恨をまた誰かにつなげてしまうと思うのです。彼女を処罰しただけでは解決しないのです。彼女のような苦しみを持った人が、きつとほかにもいるんです……」

話しの途中で、私は足元が怪しくなるのを感じた。薬を飲まされ、寒い中を下着姿で走りまわり、馬の背にゆられ続けていた緊張が、緩んできたに違いなかった。私はそのまま気を失ってしまった。

気が付くと私は中納言家の局の自分の部屋に寝かされていた。そばでやすらぎが見守っていてくれたようだ。

「ご気分はどう？ 顔色は随分良くなったみたいだけど」
やすらぎが私のひたいに手を当てて聞いてくれた。

弱っていた身体を寒風にさらしていた私は、あの後ひどい熱を出して、一晩中眠っていたらしい。

「姫様の典薬の助（医師と薬剤師を兼ねた役目）が、皆に解毒のお薬を調合して下さったの。あなたには熱さましの薬も用意して下さったのよ。今夜には姫様もお戻りになられるわ。何か召しあがる事が出来る？ あなたはあまりお食事もとらずに薬を飲んでしまったから、一層深く影響を受けてしまっていたの。何か食べれば回復が早まるそうよ」

そういえば空腹感が襲って来た。昨日から殆んど物を食べてはいなかった。私は用意されていた食事をありがたく頂いた。確かに身体は回復しているのが分かる。

「桜子さんは？ 他の一味とともに取り押さえられたのかしら？」

やすらぎの表情が曇る。

「桜子さんは……。自害なさったそうよ」

自害！

「検非違使の役人が駆け付けた時にはすでに自分の喉を刺してこときれていたそうよ。彼女は自分の誇りだけは守り通したかったみたい」

やすらぎの伏せた眼にはうっすらとした涙が光っていた。

自由

桜子以外の一味は、侍崩れの郎党達と、京わらんべと呼ばれる、ならず者ばかりが捕まった。

彼らは私の脱ぎ棄てていった衣を持って、「女房の衣装目当てに誘拐した」と言っているそうだ。検非違使も取りたてて尋問を強いたりはしていないらしい。康行が賊を切り捨てた事さえ、もみ消されていた。

裏では前帝やそれに群がる不遇な貴族達が暗躍しているに違いないのだが、朝廷内の複雑な勢力関係を皆が気にしているので（それは表面から見通すことはできない）そういった貴族達に役人が深くかかわることは無い。

ましてや前の帝であらせられた方に、ただ人の役人達が何をできるといえるのか。結局、真実が世の中に露呈することは無いのだ。桜子は何のために大胆な事を企てた拳句、死なねばならなかったのだらう？

桜子の自害は私にとって十分衝撃だったが、同時に桜子への悔しさがかみ上げてもきた。

もう私が何を思おうとも桜子の心に届くことは無い。

桜子さん。あなたは死ぬべきではなかった。死んではいけないかったわ。本当にこの世に恨みがあるのなら。私へのねたみと、憎しみがあるのなら。これじゃ、なにも世の中に届いていないじゃないの。

何故、命あるうちに私にもつとこの世の不幸を知らしめなかったの？ 大納言様達にはつきりとおっしゃらなかったの？

しかし私は考え直す。私達女人が、本当に男君の方々に物を伝える事なんて出来るのだろうか？

もしも本当に桜子さんが、あの検非違使の役人に心の内をぶつけるのなら、越後国司の娘として彼の邸に乗り込むしかないだろう。そうすれば気のふれた愚かな女が男君の元へ乗り込んだと都中の笑いものになり、彼女も彼女の一族も、誇りの欠片も失うような事になるのかもしれない。

まして大納言家にいたつては、彼女の一族の存在すら、もみ消してしまいかねない。彼らの傲慢な耳には、どんなに私達が声を立てても届くことは無いだろう。彼女の胸につかえた心を吐き出すにはあまりにも犠牲が大きすぎるだろう。

御仏は女人は生まれた時から罪を背負っているのだという。その罪ゆえに自らの心のままに生きることができないのだとか。そんなにも罪深い女人を、何故男君は求め、利用しようとするのだろうか？

桜子さん。あなたは結局この世で自分の心を誰にも伝えることはできなかった。私を除いては。

私はあの時のあなたを決して忘れない。憎しみをたたえて立ち上がったあなたを。私だけはあなたを理解するわ。

それでいいでしょう？

「やすらぎ。今日の合奏の他に、私に独奏で琴を弾かせてもらえな
いかしら?」

私はやすらぎに頼んだ。

熱の下がった私は縁に出て康行と会った。康行はだまりがちでそ
れでも私に櫛を返してくる。

「ありがとう。昔の約束を守ってくれて」

私は自然に礼が言えた。

「この後若君に会うそうだな」

康行はさびしげな表情で言った。

「ええ。異例な事だけれど、大将様は今朝、こちらに残られたの。
体裁を取り繕うために空の牛車は返したけれど。このあと私と会っ
て、夜には三日夜の宴にお出になられるわ」

「若君の妻になるのか?」

康行は直接的に聞いてきた。その方が康行らしい。

「いいえ。その話はお断りするわ」

私は言い切った。

「無理をする事は無いんだぞ。越後の国司の娘に何を言われたかは
知らないが、お前が若君に認められたのは他でもない。お前の心根
が若君や姫君に通じたからだ。お前は周りに流されるだけの女じゃ
ない。自分の意思で都に入り、自分の言葉で姫君の心を動かし、女
房になった。そして姫君のために命をかけて、若君の心さえも慮っ

て、敵の手から逃れたんだ。お前は胸を張っていい。これはお前がつかんだ当然の権利だ」

康行はそういった。そう言ってくれた。私の行動を間違いでなかったと認めてくれた。その気持ちが嬉しい。

「そうかもしれないわね。でも、私は妻の座はいらさないわ」

「どうせ、世間はお前を若君の情人として見るようになる。お前は若君と密接に関係したし、昨日は若君も隠し立てすることなく、お前をあつかった。車に乗るように指示を出し、御自分の着物を着せかけた。あれですでお前は若君の恋人としてみなされる。お前が何を言おうと世間の目は決まってしまうんだ。だったら妻として認められる方がずっといいはずだ」

それは分かっている。おそらく大将様もそれを承知で私をそうあつかったのだ。やはり女の扱いが巧みでいらっしやる。まるで詰め暮の様に女人達のいきつく先を決め、追い込んでしまう。

しかしそこに悪意は無いのだろう。むしろ自分の誠意を女人に与える手段だと信じて疑わずにいるに違いないのだ。それが女人にとっては時として傲慢に見えたとしても。

「いいえ、違うの。私は根っからのじゃじゃ馬なの。世間の言うとおりになんて生きられないの。身分が低いといわれれば、女房になりたくなるし、田舎者と言われれば都で暮らしたくなる。

大将様の妻になるのが荣誉だといわれれば、そうはなりたくなくなるの。私は誰の物にもならないわ。私は私。この都で、私は自分の力を試したいのよ。姫様のもとで、どこまで世間に逆らって生きら

れるのか力を出しつくしてみたいの」

「本気で若君の申し出を断る気か？」

「本気も本気。私には高い身分もない。でも、卑屈になつて誰かの世話にすぎろつとも思わない。私は都で一番自由な女になるの」

「そんなか弱い女人の身で、どんな自由が得られるつていうんだ」
康行はあきれ顔だ。

「心の自由よ。本当なら誰もが持っている自由よ。きっと桜子さんが一番手にしたかつたものよ。彼女はあきらめてしまったけど、私はあきらめない。この心だけは手放さないわ」

「まさか、お前、尼になる気か？」

尼になれば男女の交わりは禁止される。勿論結婚もできないし、親子の情も、友情さえも否定されてしまう。生きながらにしてこの世の人々と縁を切ってしまう。それは確かに心が自由かもしれない。そして孤独だ。

「違うわ。私は俗世に生きたまま、この世を愛したまま、自由に生きるの。私だけの生き方よ」

私は桜子さんとは違うやり方で、この世の中に逆らつて見せる。あらためて、そう、決心した。

私は大將様と会つた。扇を使わないのは勿論、几帳を隔てる事さ

えしなかった。それは私には必要がない。正面から面と向かって大将様の目を見ていった。

「結婚のお申し込みは、この場でお断りさせて頂きます」

私に歌は似合わない。はしたなくてもいい。田舎くさくてもかまわない。私は自由だ。

「大将様のお気持ちはともうれしいけれど、私は妻にはなれませんが。たとえ姫様がいらっしやらなかったとしても」

大将様は少し微笑まれながら

「そう、おっしゃるんじゃないかと思いましたよ」

と言って、私に文を差し出した。良く見ると私が大将様にお送りした文だった。

「これはあなたにお返ししましょう。ほととぎすは藤に鳴く時を聞いたりしてはいけなかった。しかし私はあなたをあきらめませんよ。あなたの心の池を波立たせるまで、気長に構える事にしましょう。それまでは私達には美しい友情が一番似つかわしい。しかし康行には負けません。薄衣一枚のあなたを抱きかかえるような真似は二度と彼にはさせませんから」

そう言うてにっこりなさる。

「私もあのお文をお返しします」

私は懐から文を出そうとしたが

「それには及びません。いつか私はあなたの花を開かせることが出来るかもしれない。それまで楽しみにとっておいてください」

大将様は強気な、少しいたずらっぽい笑顔をお見せになった。

「今宵の琴は、お二人のために心をこめて引かせて頂きます」
私はそう、はぐらかした。

寢所のひさしの方が騒がしくなってきた。男車がお着きになるといのである。どなただろうか？

「ああ、お着きになったようですね」

そう言つて大将様は立ち上がる。皆がひさしへと向かつて行く。何故か中納言様や、北の方までもがお車を出迎えた。

良く見ると、それは大将様のお車だった。見慣れたお車の中から現れたのは、見知つた上？達と姫様だった。今朝お返しになった車に姫様がお乗りになっていたということは……。

「そうですよ。姫君は大納言家にいらしたのです。変な所にかくまわれるよりは、よほど安全だろうと思つてね」

大将様は私に説明なされた。

ああ、お二人はすでに真の御夫婦でいられたのか。だから大将様は私の事を姫様に御相談出来たんだ。姫様も今までの一部始終を全て知つてらっしゃるんだわ。

大将様はお車に近づくと、姫様を両手で抱きあげて差し上げた。これは本来、帝の御皇女様が貴族の家に御降嫁される時に行うことである。大将様は姫様をそれほど特別にあつかつて下さつたのだ。中納言様などは「おお」と声を洩らされたし北の方にいたつては涙をこぼしていらつしやうた。

私は頭を下げながらも思ってしまう。まったく大将様は女人の扱いに長けていらっしやるんだから。

一心地つくと姫様が、私をお呼びになった。

「あなたには本当につらい思いをさせましたね。桜子はあなたと同室だったのでしょうか？」

やはり全てを存じているようだ。

「桜子さんは、私たちの水鏡だったのでしょうか」私は答えた。

「あの人は、私達の不満や苦惱、戸惑いを映してみせる水のような人でした。そして私はそれを覗いてしまいました。でもそれは決して真実だけではありませんでした。彼女の心は波打っていて、その姿は歪んでいましたから」

「あなたにはそれが分かるのね。あなたは素晴らしい人だわ。私はあなたに何をして差し上げればいいのかしら？」

私はただ一つ、本当に欲しい物を答えた。

「私が欲しい物は、一つだけ。心の自由で御座います」
姫様には伝わるのであろうか？この思いが。

三日夜

三日夜の宴は華やかに行われた。数々のご馳走が用意され、女房達は華やかに着飾り、従者や、下男、下女にいたるまでが振る舞い酒に酔っていた。

室内は美しく飾られ、大勢の貴人たちが酒を酌み交わしている。この場にふさわしい晴れの歌や詩が詠まれ、それに合わせて管弦の調べが奏でられる。宴もたけなわだ。

続いて女人の琵琶や琴が合奏され、私も皆と音を合わせていく。そしてやすらぎとの合奏が続いた。

そして私の独奏となる。大将様と姫君様の許可を貰ったの演奏だ。私はこのためにここにいるのだ。

初めの音には自分の心を乗せた。軽やかに、一つ調子に。都への憧れ、様々な出会いがもたらしたときめき、都のにぎわい。

だんだん音は穏やかになる。姫様の優雅な御様子、結ばれる友情、穏やかな日々。優しい調べのうちに時折入る穏やかならざる音。桜子の隠された心。

音が変わる。激しく、強く。桜子の苦しみ、悲しみ、怒り、そして、求め続けた思い。琴の弦が切れんばかりに私は奏でる。私に向けられた憎しみを奏で続ける。

人々が息をのむのが分かる。衣はずれ、髪が乱れようと私も私は全

身で弾き続ける。誰もが耳を傾けている。

やがて音は清浄なものに変わる。弱く、たどたどしいが、細やかな調べ。何かを切々と求める調べだ。

そして音はたおやかに初めの音へと帰っていく。軽やかで一つ調子な音。だが、初めとは明らかに違った印象を与えているであろう音。私はそつと、最後の弦をはじいて演奏を終えた。

誰もがため息をつき、さざめくような声を漏らしていた。きつと伝わった。桜子の心は今ここで蘇り、終息を迎えたのだ。私が出れることはここまで。後はそれぞれの心の中にこの音は生き続けられるだろう。

宴はまた晴れやかな華やかさに満ちていく。桜子の憎しみはそこにはもうない。

宴の終わりに私は姫様に呼びとめられた。

「花房。私はあなたに何をすればよいのか分かりました。あなたはすばらしい演奏家ね。奏で続けなさい。続けなくてはならないわ。あなたの琴は百の言葉に勝るとも劣らないわ。あなたは私達の大切な何かを伝える事が出来る。あなたの心は自由でなくてはならない。あなたの琴は自由なままに奏でられなくてはならない。私はそれを守り続けましょう。あなたは奏で続けるのよ」

伝わった。少なくとも、姫様には私の思いが今はつきりと伝えられた。これこそが私の願うところだった。

「奏で続けましょう。一人でも多くの人の心に届くように」

女人の言葉は世の人々に届けることは難しい。だから、心揺さぶられる歌は流行歌として伝え続けられていく。

私は琴の音でそれを伝えよう。それを伝えられる心を待ち続けていよう。いつでも奏でられるように。

宴が済むと自分の局へと私は戻った。桜子がいなくなったので今では一人部屋になってしまった。何だか部屋ががらんとして見える。

ふと足元を見ると、戸口に近くに手折られた咲いたばかりの白い梅と、折りたたまれたみちのく紙があった。手紙だろうか？

普通、女人に贈られる手紙はうすよつと呼ばれる、薄く、淡い色の付いた美しい和紙が使われる。真っ白な厚手のごわごわしたみちのく紙で手紙がよこされることは無い。開いて見ると力が入り過ぎて、やたら太いばかりの文字が飛び込んできた。こんな手紙をよこすのは康行しか思い浮かばない。

中には歌が書かれていた。あんなに苦手なはずの歌が。

「我が駒が足を止めたる琴の音は初花よりも深く匂へり」
いい演奏だった。良くやった。

真つ直ぐでひねりのない、康行らしい歌だと思った。私の琴はこの梅の香よりも深みがあるらしい。

おそらく康行の居る所にまで琴の音は届いていたのだろう。私の演奏はよほど良かったらしい。私は一人、笑みをこぼした。一人部屋の虚無感が少し和らいだ気がする。康行なりに気を使ったのだろう。私も返歌を書いた。

「みちのくの ゆきとみまがう しらうめの かおりたつよに ころなくさむ」

今度の手紙はうすように書いてね。

みちのく紙なんかには和歌を書いてしまふ康行に、ちよつぴり皮肉を込めたのは照れ隠し。康行はこれからも私に手紙を書いてくれるだろうか？ 会った方が早いと、また縁に近寄って、私を呼びとめるだろうか？

散々な目にも会ったけれど、都暮らしも悪くは無いわ。私は梅の花を眺めながらそう思っていた。

翌日、康行はご機嫌斜めだった。彼にしてみれば歌に花を添えて人に贈るなんて、一世一代の決心がいる事だったようだ。

「お前は本当に何にも分かつちやいなんだな。俺みたいな男が雅やかな真似なんか出来る訳がないんだ。もう二度と歌なんか送るもんか。どうせ若君と比べられるのがオチだ」

そう言っつてすっかりむくれてしまっつ。

それを見て私は逆にご機嫌になっつてしまっつ。知っつてるわ、そのく
らい。私が大將様からお歌を送られてゐるのが氣になっつて、わざわざ
慣れな歌を読んだのよね。だから私は嬉しくて、次の手紙も書
いてほしいと暗にほのめかしたのだけれど、康行は氣付いてゐるの
かどうか？

「ニヤニヤして、何を考へてゐる？」

そんな事言える訳ないじゃないの。

「別に。あんたの歌の読みぶりをちよつと思ひ出ただけよ」

「もう絶対に歌なんか送らないからな！」

「怒らないでよ康行。あの歌はいい歌だつたわ。ありがとう、私の
琴を褒めてくれて」

「ふん、歌なんか書かなくてもこうやっつて言葉でかわした方がずつ
と手つ取り早いや。都のやり方は性に合わない」

そうね。本当にそうだと思っつ。でも、都で暮らす女人には、自分
の意思を伝えるためには、こんな方法しかないんだわ。歌を歌い、
琴を奏で、しぐさ一つでものを伝える。私はそんな世界で、琴の音
一つで立ち向かおうとしてゐるんだわ。それは苦しいことかもしれ
ないけれど、康行や、姫様、やすらぎ大將様が見守つていてくれれ
ば、勇氣を出してやっつていけそうな氣がする。

「康行。私、都で生きるわ。どこまで頑張れるか分からないけれど、

姫君様のもとで、粘れるだけ粘ってみる。当分郷里には帰れないわ。あんたはもうすぐ馬の世話に戻るんでしょう？お父様達に伝えてね。私はここで生きていけるって」

康行はむくれ顔を少しだけゆるめて、こつくりとうなずいた。

「俺もすぐに都に戻るさ。こんなじゃじゃ馬危なっかしくてほっとけるもんか。若君にだって気をつける。あれでなかなかお人の悪いところもあるんだからな」

そう言って康行は侍所へと帰っていく。

今度会う時、私は、都に染まらずにいられるだろうか？

染まらぬように精いっぱい逆らって生きていきたいと思うけど。

私はそう思いながら康行の背中を見送った。

噂

姫様の三日夜の宴からふた月。私の事は、すでに都中の話題になっ
てしまっている。

中納言家のとんでもない、やんちゃ女房と言えば、私の事。ある
いはこの春の除目で近衛の大将に御出世されたばかりの、大納言家
のご長男にまわりついた、たちの悪い女君、と言ったところか。

そう言われても仕方がない。この三カ月は、御世辞にも平穩無事
な日々だったとは言えなかったのだから。

大将様との事だつて、世間が言うような仲になつた事なんてない。
たった一度、お歌をいただいただけだ。

それにしてもこのふた月の間、都人の口さがのない事と言つたら
！噂話の質でいったら、故郷の武蔵の国の方がよっぽどマシだった。

初め、私はかの、悪評高い前帝一派にさらわれた悲劇の女房とし
て持ち上げられたらしい。実際、それは事実だし。

問題はその後だ。私は大将様と、姫君様のご婚礼の三日夜の宴で
琴を弾いたのだが、かなり、斬新で、独創的な弾き方をした。全身
で、感情をこめて、髪が乱れようと、裳が、ずれ落ちようとま
まわず弾いた。

これに都人の意見は真つ二つに分かれたらしい。

これまでに誰も聞いた事のない、初めての調子、初めての音色。

天女が弾く虹の琴のようだと云う、称賛の声。

そして、心を乱す、乱暴で、独りよがりで、もののけがついて人を惑わしているようだという、非難の声。

そんな声が渦巻く中で、私は思い切った行動に出た。わが身を隠す事をやめたのだ。

貴人に仕える女房と言うものは、屋根の下で暮らし、邸の外の者にはなるべく姿を見せず、御簾の中に几帳を立てて、その影に扇で顔を隠して暮らすのが、しとやかで恥じらいのある生き方だと世間では言われている。特に都では。

しかし私はそれを良しとしなくなかった。その考え方を否定して生きる覚悟を決めた。堂々と顔をさらけ出した。

当然それは、あつという間に噂となって広まった。私のそれまでの行動にも尾ひれがついた。

実は私はさらわれたのではなく、自ら前帝達に近づき、薄衣一枚の姿で誘惑して金品をだまし取っていたとか、本当は姫様を恨んでいて、しびれ薬を盛ろうとしたとか、大将様に姫君様の悪口を吹きこんでいるとか。

しまいには、あの、宴で琴を弾いた時は、天岩戸にこもったアマテラスを誘うのに、胸元を広げて踊り狂った浮かれた女神のように、半裸になって弾いていたとまで言われてしまっている。

なんでこんなに言いたい放題言われるのかと言えば、なんてことはない、私の父の身分が低いからだろ。

人の噂をある程度信じるなら、私なんかよりも凄い事をしている女房なんていっぱいいる。

実家に金銭的な余裕がなければ、自ら儲け話を振りまいて、貧乏公家に金を貸して蓄えを増やしている人もいるらしいし、地方の受領に情を通じて経済的に援助を受けている人もいるらしい。現実問題として、女房暮らしは華やかな分手当もいいが、支出も結構かかるのだ。

それまで私は身分は低いが、金には困らない父のおかげで、そういうことにはまるで疎かったのだが、都暮らしが長くなるにつれ、そういう裏事情も理解できるようになってきた。

そんな都で、上京したての小娘が、親の金の力で女房に成り上がり、雲の上人であるはずの姫君様のそばにお仕えし、その、背の君である大将様を恋人にして（これは誤解なのだが）二人の後ろ盾をいい事に、好き勝手にふるまっているのだから、そりゃあ、恨みもねたみも買って当然なんだろう。

だから私の噂が、都中に広がっても仕方のないことだと思っただし、姫君様と大将様の後ろ盾も私は大いに利用させてもらって、堂々と顔をさらしたまま、姫様のお世話をし、暮らしを整えて差し上げ、琴を弾きならしていた。

ところが、まさかその噂が、今上の帝のおられる、九重の宮中のかなた、御所の奥深い御簾のうちにまで届いていようとは思っても

みないでいたのだ。

その夜、大納言の長男である近衛の大将は、久しぶりに御所の宿直をしていた。

中納言家の一の姫と結婚したばかりの新婚と言う事で、しばらくの間は目を開けずに中納言家に通っていたため、帝の身をお守りする近衛の大将と言う身分に出世したばかりだったにもかかわらず、ふた月の間ほど宿直は免除してもらっていたのだ。

大将はしばらく、私的な時間に主上とお目にかかる事もなかったので、その大将が宿直していると聞きになると、主上（帝）は早速、大将を暮のお相手にとお呼びになられた。

前帝は「訳あり」で失脚なされているので、今上の帝はまだ十九とお若くていらっしやった。

だから、年の近い一つ下の大将などは、御公務から離れられると良い話し相手になるらしく、管弦の遊びのお相手や、宿直の夜の話し相手などには、よくお呼びつけになるのだ。今夜は久しぶりの暮のお相手らしい。

大将の方でも、主上からのお誘いは嬉しかった。暮のお相手も楽しみである。

大将は幼い時から主上の元に童殿上して、主上とともに手習いを受けて育っていた。

おそらく父である大納言が、前帝よりも当時東宮だった主上に目をつけて、自分を親しい位置に据えたに違いない。実際、そのおかげで大将は今の地位を手に入れていた。

それはさておき、幼い頃からまるで乳兄弟か、幼馴染のように育った主上と過ごす時間は、大将にとっても楽しいものがある。身分は違えど、腹を割った親友に会うような心地さえするのだ。

貴族たちの世界はとてせまい。まして上流ともなれば、付き合いのある人間は、皆、血縁が誰かに突き当たってしまうほど世間が狭い。その中でさまざまに接するのは、むしろ召し使う身分の下の人間たちだ。

貴族の生活とは昼夜問わず、人々に囲まれた生活でもあるのだから。人がいなければ成り立たないのだから。

彼らは自分達の地位を守るためにも、長年慣れ親しんでしまう心情的にも、召し使う者たちを懸命に養っていく。

召し使われる者たちも、そんな彼らに心を寄せるし、まさに手足となつて働いている。

実生活ではあまり顔も合わせる事もなく、関係も希薄になりがちな親類縁者や、離れて暮らす父、母、兄弟など、政治的な風向き一つでいつ、心が変化するか分からない同じ血筋の人間よりも、時として、より深いきずなが生まれることだつて少なくは無い。

恋や友情だつて当然生まれる。主従関係とは奥の深い物なのだ。

それはたとえ、帝と臣下であつても変わりはないらしく、主上と大将の関係は、まさにそうだったものであるらしかつた。要するに二人は気が合うのだ。

そんな気の合う主上と、大将は久しぶりの暮で主上に押し気味の展開をしていた。遊びで花は持たせない。それが主上との、昔からの約束事である。

「うづむ。腕をあげたな。ここの隅を取られたのは痛かつた。こつちの地を取られまいとムキになり過ぎたかな？」

「婿入り先の中納言殿は暮の名手でいらつしやいますから。お相手をしているうちに、私の腕も上がったようでございます」

「なんだ。宿直もせず暮の特訓をしていたのか？ これではかなわぬはずだ。それでは夫の務めも果たしているか分からないな」

主上は負けを認めて暮石を器に戻しながら笑つた。

「新婚と申しましても、妻はまだ、十五で御座います。まだまだ形ばかりで、子供の遊びのようなものですので、中納言殿と暮を打ちましたり、女房達に話し相手になつてもらつて居るのですよ」

大将がそういうと、主上がまるで待ち構えてでもいたかのように視線を合わせて来た。なんだ？

「そうそう、中納言家の女房と言えば、大将は早速、お気に入りのお房を見つけたそうじゃないか。まだ新婚だというのに、偉く手回しが早い事だ」

主上はそうからかつて笑われる。

花房の事か。これはちょっと厄介だ。普通の女房を落とした後なら戯れ話を主上と楽しくできるところだが、花房は事情が違う。こんなところはまだ噂が広まっているとは思わなかった。

「別に手などまわしていませんよ。実務的なやり取りなどを言付かってもらっている、普通の女房の一人です」

「普通かな？ 何でも大変なやんちゃぶりで、顔も隠さずに歩くそうではないか。しかもたいそう面白い琴の弾き方をするのだろうか？」

噂ほどの辺までねじれて伝わっているのだろうか？ あまり品のない事もいいかねる。

「それほどでもありませんでしたよ。やや、斬新ではありませんが、美しい、良い音色で御座いました」

「良い音色か。本当は大将が手とり足とり教えたのではないかい？ 衣を着せかけた仲だそうじゃないか」

大将は返事もせず、曖昧な笑い方をした。自分は宮中では名うての色事師、女人相手ならそんじょそこらの男達には負けないという自信がある。そういう自分が結婚まで持ち出したのに、身分の低い、わずか十六の娘に袖にされたとは絶対に知られたくない。あまり突っ込まれたくない話だ。

「お前は笛が得意だが、その琴の音と合わせた事はあるのか？」

「いいえ、そのような機会がありませんので」

大将はなるべくそっけなく答えた。

「それはもつたいないな。私はその琴の音と、お前の笛を合わせた演奏を、ぜひ、聞いて見たくなった。今度、後宮で女雅楽の演奏をしたいと思います。その、中納言家の女房も殿上させて、お前の笛と合わせてみよう」

主上は好奇心丸出しで、面白そうにおっしゃった。

これは厄介な事になったと、大將は心の中で齒がみする。

好奇心

主上のお戯れに、大將はややうつとうしさを感じた。本当のところ、花房を宮中に連れて来たくはないのだ。

まさか花房が自分の顔を潰すような事は無いのだろうが、小娘に気を回す姿を主上に勘づかれたくもない。

それに自分が花房に興味を持ったのは、主上と同じくもともとただの好奇心からだった。

金持ちとはいえ極端に身分が低い父を持つ娘が、大胆にも中納言家に入り込んで、一の姫の最もそばに仕える身となっている。しかも姫のお気に入り。さらには琴の名手だという。これだけでも好奇心をそそられた。

さらに、馬の世話を任せている朴念仁な康行が、その少女の行動に振り回されている。目が離せず、気がそらせず、わずかな事でもうるたえているのが分かった。これは面白そうな娘だ。

実際に会ってみると、田舎者らしく、粗忽で無遠慮で気が強い、そのくせ、おおらかで、慕わしそうな、明るく人を引き付ける、意志の強さを持った娘だった。

女君と呼ぶには、まだ幼さが残るような娘なのに、明るい何かを一つ信じ、それを真っ直ぐに貫こうとする強い輝きが感じられる。そこには不思議な信頼感があった。

役目がら、宮中にいると、沢山の女房達に囲まれている大将としては、ちょっとした恋のやり取りは日常生活のうちだった。

若い女君には自分の寛容さと大胆さを見せつけて、華麗な歌を送っては時に冷たく、時に情熱的にふるまって見せる。年上には少し背伸びをしているように見せ、そのくせただどしい歌を細やかに、まめまめしく送っては、丁寧な気遣いを見せたり、甘えてみたりする。

そうすると女君たちは、自分との程よい距離感を旨く見つけ出して、自分をくつろがせてくれたり、勇気づけてくれたりする。目上の方々のいる席で、さりげなく褒めてくれたり、話がまとまりやすいように助けてくれる事もある。

朝廷では正論を交わして、自らの意見を通さなくては潰されてしまう恐れがあるが、後宮の行事や、私的な宴の席では、若い自分あまり強くものを言う訳にもいかない。そんな時に自分に有利な雰囲気を作り出してくれる女君たちの存在は、大将にとっては必要不可欠だった。

そんな暮らし方をして来た大将に、信頼感を寄せられそうだと思わせる少女。その真っ直ぐな気性は都の女君には無いものだった。

何もかもに恵まれて見える大将にも、苦悩はある。父親の作り上げた地位に対する重圧だ。

自分は長男である以上、父の作り上げて来た現在の権力を、受け継がなくてはならない。自分達の一族で、都を牛耳続けるのが、我々の悲願だ。自分はその中心とならなくてはいけない。

そのために、幼い頃から努力はして来た。人に認められるように、遠い大国の最新の政事を学び、これまでの朝廷の出来事を学び、季節の行事や、管弦の遊びにすら、手を抜かなかった。

そうやって自分を固めた大将が、何よりも必要としているのは信頼して話す事が出来る、身近な人物だ。

主上は御信頼申し上げている。身分から御自分の思うようにならぬ事も多いだろうが、それでも大将の事を全力で守ろうとして下さるに違いないと、大将は信じている。

父もおそらくはそうであろう。長男の自分への信頼は、他の兄弟や役人たちよりは持って下さっているようだ。当然、生みの母からの愛も感じてはいる。

では他に？ と、考えると、乳兄弟と、康行ぐらいしか思い当たらない。他の家来たちもそれなりには信用しているが、安心して信頼できるかと言えば、物騒な今時のこと、多少の不安が付きまわってしまう。

それなのに、花房には信頼できそうだという勘が働いたのだ。

花房を妻にしても良いと思ったのには、勿論、一の姫を守ろうとする心根に対する礼の気持ちもあったが、これからも信頼を寄せられそうな女君と言う、心づもりがあったからだ。だから、彼女には自分が与える、最大限の条件を告げたのだが、何と、断られてしまった。そんな予感はあったのだが。

容姿にも、恋の手管にも自信はあった。まして、最良の条件を告げたはずだった。

やはりこれは普通の女君ではなかった。しかも、我々の顔を立て、一の姫の命を守ろうとする、物怖じをしない女人。

まだ年若いというのに、何という手ごたえだろう。身分はいやしなくても、この真っ直ぐさ、この自尊心の高さは、宮中の女官たちにも、決して引けを取ることはあるまい。

これほどの手ごたえ、これほどの矜持。これは強引には奪えない。そんな事をすれば、彼女の最も素晴らしい部分を失ってしまうだろう。

しかも彼女は康行を意識している。彼が送った櫛をその身から離さずにいる。悔しいが、彼女にとって私は康行と同列、いや、もしかしたらその下に位置しているのかもしれない。彼女の心のはかりにかけられれば、身分など何の役にも立たない。花房とはそういう女君なのだ。

その花房に、主上は好奇心を向けられた。お会いになれば、彼女の持つ、独特の何かに気付かれるかもしれない。自分がそこに太刀打ちできずにいることにも。ましてあの琴の音を聞けば……。

大将は気が気ではなかったのだ。

「その女房は身内を頼って上京しているのか？」

主上は脇息に持たれながら、のんびりと聞いてきた。

「母親の妹が、御所勤めをしているそうでございます。梅壺の更衣につかえる女房で、命婦と呼ばれているそうです」

「梅壺か。しばらく足を運んでいなかったな。女官に言つて、その命婦とやらに話を通しておこつ。女雅楽まではまだ、十日あまりある。その女房にはそれまで梅壺に滞在させるがいい」

「本当にお呼びになるおつもりですか？」

大将は未練がましく聞いた。

「なんだ？ 大将はいくらでも聞ける琴だろうが、私はこうでもしなければ聞けないというのに、嫌がるのか？ これは余計に聞きたくなるな」

「彼女の身分では、役人の許可が下りないのでは？」

「親はともあれ、本人は今、中納言家の女房だ。お前の後ろ盾もある。そういうことはお前の方が得意だろう。その、命婦の身の回りを世話する者として、宮中にあげればよい。雅楽の日には私が呼ぶ」

そういつて主上はすっかりその気になつてしまわれた。こうなると、大将は花房を宮中に上げない訳にはいかない。

「お前も笛の練習をしておけよ。女君の前で恥はかきたくあるまい。そういつて主上は楽しげに笑われた。

いつものように大将様が姫君様の寝所にいらっしやった晩に、私は姫様がたの御前に呼ばれた。いつものようにお二人お世話をしようとしたが、大将様がお話があるとおっしゃった。

「実はお前に宮中が上がって欲しいのだ」

あまりの急な話に私はピンとこなかった。宮中？ あ、御所の？ そばにいたやすらぎさえもが動きを止めた。

大将様は事の次第をかいつまんで説明された。私の噂が、そんなところにまで伝わっているとは思わなかったので、私もびっくりしてしまう。

「お前の叔母には明日、宿下がりをさせるから、お前の叔母のもとで支度を整えるといい。後宮の中の事は叔母が教えてくれるだろう。私も決して詳しくは無いのでね」

大将様は淡々とおっしゃるが、私にとっては一大事だ。ただ人中でもいやしい私が、後宮に上がって琴を弾く？

私のような者にとっては御所は天の上にも等しい場所だ。ましてその奥深くの後宮なんて、いくら身内が勤めているとはいえ、まるで別世界だとばかり思っていた。上がるどころか、門前に近づく事も恐れ多いとっているのに。

「私と中納言殿が後ろ盾になっているのだ。お前は余計な事は気にせずに、と言っても、お前が人目を気にしないのはいつもの事だが、思うがままに琴を弾いてくれ。主上もお喜びになるだろう」

そういう噂を耳にしてのご所望じゃ、どのくらい真面目に聞いてもらえるか分からないけれど、まさか帝の命を断る訳にもいかない。あんまり恐れ多すぎる。

そんな訳で私は全くの突然に、御所に上がる事になってしまった。これで世の人々は、一層私の噂を面白おかしく広めてくれるんだろうなあ。

「あなたのお父様に、雅楽の日のご衣裳と身の回りの物をお願いしなければなりませんね」

叔母は突然の事にうるたえながらも、私の仕度を手伝ってくれた。

「ご衣裳は前日までに役人の手元に届くように手配しましょう。お化粧道具は今の物で事足りると思いますよ。あなたの身元を証明する書面は、明日、御所で、役人に渡しますから、忘れないようにね」

さすがに普段御所に勤めているだけの事はあつって、速やかに支度が整って行く。

「こんな突然の事に、色々手をまわしていただいて」

私は叔母に礼を言おうとしたが、叔母がさえぎった。

「いいえ、とんでもないわ。これは私がお仕えする、更衣様にとつても、大切な機会になるの。ここ最近では中宮様（皇后）のご威勢がとても強くて、他の女御様は皆、かすみがちだったし、まして更衣でしかないうちのお姫様には、長らくお渡りもなかったのよ。あな

たの事がきつかけになって主上が梅壺にも、こまめに通われるようになって下されば、こんな目出たい事は無いわ。あなたには是非、頑張ってもらわないと」

頑張れって、言われたって、あちらは噂話の好奇心で、私を見せものように考えてるっていつのに、私が何を頑張ればいいのか。そんな期待を背負わされても困るんだけど。

そうは思ったが、お世話になっっている以上口にも出せず、私は叔母に言われるがままにあれこれと準備を整えていった。

正直、話を聞いた時は「御所ってどんなところだろう?」と、こちの好奇心も掻き立てられたが、叔母にいきなり妍を競う話を聞かされて、ああ、またそういう世界が見えてしまうのかと、夢が一つ壊れた気分がしている。

果して私は御所で、いったい何を見せつけられるのだろうか?

御所

叔母に連れられて初めて訪れた御所は、ただただ、広いところだった。新参者が一人で入ったりしたら、間違いなく迷って出られなくなってしまうそう。

中納言家も大きなお屋敷だし、大納言家も外から見ると、塀がどこまでも果てなく続くような、広大なお屋敷だ。

ところが御所となると、もうこれは町が一つ、いや、三つ四つはあるのと同じで、そういう部分では大納言家にも似ているのだが、中に、古木がたくさん見受けられて、まるで森のようなところが沢山ある。

庭の一つ一つも大きく広くて、その中に巨大な建物が、いくつも連なっているのだ。女車の中で叔母が指さす。

「紫宸殿は、国の政事が行われている場所よ。帝の詔もここで下されるの」

牛車は奥へと入っていく。

「ほら、ここが主上がお住まいになられている清涼殿よ。向こうに女御様方が暮らすそれぞれの御殿が見えるでしょう？それから梨壺、桐壺、梅壺」

叔母は次々と案内してくれるが、私は御所の巨大さに呑まれて、まるで耳には入っていない。

それにここはすべてが古めかしい。京の都が作られてから、ここ

は国の中枢だった。その歴史が脈々と生きている事が感じられる建物だ。御所の中には鬼が済むという世間の噂も、成程これならば、と、思わせるものがある。古めかしい建物に巨大な森。夜、とても一人では出歩けまい。

私達は真つ先に梅壺の主である、梅壺の更衣様にご挨拶に上がった。

更衣様は小柄できゃしゃで、おとなしやかな、いや、もっとはつきり言えば、気の弱そうな方だった。何と云うか、覇気がない。こんな広大で古めかしい御所の中で、ひっそりと隠れるように生きている感じがする。

多数の女御、更衣が妍を競っている後宮に暮らしているのだから、もっと、堂々と、きらびやかにしている方かと思っただら、随分地味な印象がある。中納言家の一の姫様もおとなしい方ではあるが、ずっと明るく、生き生きとしておいでだ。お歳はこちらの方の方がずっと上だろっけど、性格は正反対なようだ。

申し訳ないけれど、私は最初の印象で「うっとうしい方だなあ」と思ってしまった。これじゃ、主上の足も遠のくわ。

ただ、私を基準にしたら、すべての女人がおとなしい人になっちゃうんだろっけど。

かけていただいたお言葉も

「雅楽まで日がないけれど、よろしくお願いするわ」

と、言ったきりで、たいして表情も変わらない。そっけない方だなあ。私の噂のせいかしら？

そういえば他の女房達も、何となく身を固くして、ひっそりと暮らそうとしているように見える。のびのびとしたところがない。ここで十日以上も暮らすのか。私はうんざりしてきた。

ところが私の気を引きつけるものがあつた。庭だ。梅壺の庭はその名の通り、美しい梅が咲き乱れていた。

パツと目につく紅梅は勿論、清廉な白さが光る白梅も今が盛りとばかりに咲き乱れている。

室内には梅花香の香りがたかれているが、この香はそれだけではない、きつと外には自然な梅の香りがいっぱい広がっているに違いない。私は嬉しくなって挨拶がすむと御簾から出て、御格子をあげ、縁に出ると思う存分庭の様子を満喫した。

紅白それぞれに幾本も咲き乱れる梅、広がる香、美しいやり水と池。そよぐ風と暖かな日の光。池の周りには、苔むす岩が彩りを添え、水仙が咲いている。私は庭に出ようと足をのばしかけた。

「まあ、何をなさるんです！」
何処からか厳しい声が飛んできた。

見れば白髪の、年老いたいかにも古長けた古参の女房と言った感じの女人が、私を睨みつけていた。叔母の顔色には、はつきりと「

まずい」という字が書かれたような表情が浮かんでいる。

「何って。ちょっと庭に出てみようかと思ったんですけど」

「今時の人は、平気で端近によって、困る困ると思っていました。がよもや、縁に出て庭にまで出ようとする方がいよとは思いませんでした。世の中乱れるにもほどがあります。あなたのご両親はどんなご教育をなされたのやら」

私はかなり、むっとした。女人の教育は、乳母めのや、召し使う者よりも、両親の人格が現れやすいものと世間では言われている。だから両親の育て方を非難されてむっとしない女人がいたら、私は顔を見たい。

「お見かけしない方ですが、あなたが新参の方ですか？」

「本日から、この叔母の使い走りに使われることになっている、花房と申します。女雅楽の琴を弾くことにもなっていますので、よろしく願います」

私の挨拶を聞いて、古参の女房は、ますます嫌な顔をした。

「ああ、あなたが。お噂はかねがね伺っております。あなたは運がよろしいわ」

「は？」

「この私の居る、梅壺につかえる事が出来るのですから。私は梅壺の更衣の乳母で、小侍従と呼ばれています」

「乳母？ あなたが？」

言ってしまったから失礼だと気が付いた。が、もう遅い。だって、白髪の彼女がまさか若い更衣様の乳母だなんて想像が出来ない。じやあ、更衣様の乳兄弟の方は、この方のおいくつの時の子なんだろう？ そんな私の顔を見て、小侍従も察しがついたらしく、すかさず言う。

「これでも私は姫様と、そのお母さま、自分の子供も六人を育て上げた、乳母の中の乳母です。乳の出も、それは豊かなものでした。今でも女人として現役です。慎み深い女人というのは、いつまでも現役でいられるものなのです。あなたにも、女人としての生き方をじっくりと教えて差し上げましょう」

これは相当うるさそうな方だ。人に小言を言うのを生きがいにもしていそう。それにしても

「現役、現役って、要は男君が切らさずにいたって事じゃない。どこがつつしみなんだか」と、口に出してしまう。

勿論、小侍従は聞き咎めて

「あなたには、目上の人間への言葉の使い方から、お教えする必要がありそうね」と、私を睨みつける。

「良いですか？ この梅壺は、古式ゆかしい暮らしぶりこそが似合うのです。あの、麗景殿とは違うのです。あなたは御所の事などにもご存じではないでしょうから、私が一から教えて差し上げます。女雅楽の時までには、あなたも素晴らしい貴婦人となられますよう」

麗景殿とは女御様の住まわれる御殿の一つで、今は、大納言様のご長女が、中宮としてお住まいになられている、現在の後宮の中心となつてゐるはずのところだ。

中宮様は半年ほど前に男御子を無事、お産みになられ、今度の女雅楽の折に、宿下がりがりされている御実家の大納言家から、御所に戻られることになつていた。でも、なんでここに、麗景殿の話が出て来るんだらう？

「あの、花房はまだ、こちらに着いたばかりで、私の局に案内もしておりませんので、この辺で失礼させて頂きたいのですが」

叔母がいつまでも小言が止まらなくなつてはいけないと思つたのか、小侍従の話に割つて入つてきた。

「そつでしたね。では、一旦下がつてよろしい。夜にはまた、参上するように。一度、その琴を聞かせてもらわないと」
そついつて小侍従は私達を解放してくれた。

でも、私は小侍従がさつき言つた言葉の方が耳に引つ掛つた。私を貴婦人に仕立てようなんて、以外に大胆な事を言う人だ。

私の噂が届いている以上、私の父の身分がどれほど低いかは、真つ先に伝わつてゐるはず。

つまり、私をどんなにしつけた所で、所詮は下司の子。誰に感謝される訳でもないだらう。むしろ、私にはあまり表に出ずに、おとなしく引つ込んでいてほしいとは思つても、自分が恥をかかない程

度のしつけさえすれば、そんなにかかわりたくないというのが、本音のはず。でも、小侍従は（あれが嫌みでなければ）本気で私をしつける気持ちがあるようだ。

「どうやら彼女は貴族としてはかなり珍しく、身分で人を判断しない人らしい。案外悪い人じゃなさそうだ。」

私と気が合うかどうかは、全然別の話だろうけど。

叔母の局に着いて一心地つくと、私は早速尋ねてみた。

「ね、なぜ、小侍従さんは急に麗景殿の話を持ち出したりしたの？」

「こちらの更衣様に長らく主上のお渡りが無かった話はしたわよね？ 実はお渡りが途絶えたのは主上が中宮をお迎えになってからなの。小侍従の君はそれをとても気にしてらっしゃるのよ。」

「それは、主上と中宮様の気があったからじゃないの？ 御夫婦なんだから、相性ってあるもんでしょ？」

「違うわよ。もちろんお二人の御相性もあるのでしようけど、主上は大納言家の大将様と、大変仲の良い御学友なの。中宮様はその大将様の姉上に当たられる方なので、主上は一層、中宮様へのお渡りが多くなるみたい。それに大納言様のご威勢も大変強い物があるから、他の女御様もお父様方の事を気遣って御遠慮気味になるのよ。ましてうちのお姫様は更衣でいらっしゃるから、女御様方を差し置くような真似はできないしね。それに」

「それに？」

「こう言っちゃ失礼だけど、梅壺の更衣様の御実家は、あまり経済的に恵まれている方じゃないわ。お母上は皇族の出だから女御様でいらしてもいいくらい血筋は申し分ないけど、御父上は先の帝にかかわっていらつしやった方だったから、今では政治的権力は無いに等しいし、財力だつて……。実はあなたのお父様の援助に頼つてらつしやる所も大きいのよ。表には出せないけどね。だからせめて、きらびやかで華々しい、中宮様に負けないように、つつましかで品のいい、皇族らしいお暮らしを小侍従の君は更衣様にお求めになつているの。私達にもね」

それで、みんな、あんなに縮こまるように暮らしているのか。ああ、うつとおしい。

「だから、大将様とゆかりのあるあなたの事を、みんな、どこかで気にかけているの。あなたによくない噂がある事は知ってはいてもあなたの存在が、更衣様のお立場を強くしてくれるんじゃないかと心の中では期待しているのよ。あなたには飛んだ災難でしょうけど、あなたが梅壺の切り札になつてもらえる事を私も期待しているわ。どうかあなたも大将様の気を引いて頂戴ね。無理なお願いをしているのは分かつているけど」

無理を承知のお願いが、どうやら私には付きまとうものらしい。私は自然にため息が出てしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6635y/>

藤の花の匂う頃

2011年11月20日19時45分発行